

風鏡岳支石墓群発掘調査報告書

2006. 3

諫早市教育委員会

鳳鳴岳玄武岩群F地点玄武岩の露頭状況（東から）



鳳鳴岳玄武岩群F地点玄武岩の露頭状況（西から）



発刊のことば

風観岳支石墓群は、昭和45年に九州横断高速自動車道（現在の長崎自動車道）建設の事前の分布調査で発見されました。

その後、昭和46年支石墓分布の確認調査を長崎県教育委員会の協力を得て実施し、その成果として原山支石墓群に次ぐ規模をもつ大きな遺跡であることが判明しました。しかし、支石墓群の構成や変遷などの詳細については将来の課題として残しつつ、遺跡の保護に努められ、保存がなされてきました。

そこで、本支石墓群のもつ歴史的な事柄を明らかにして現代的意義を再確認しようとの論が高まり、今次の8年度にわたる調査となったものでございます。

調査に際しましては、風観岳支石墓群調査指導委員会のご指導を得ながら調査を実施し、また文化庁記念物課や長崎県教育委員会学芸文化課からは諸種のご指導を賜りました。

そのお蔭をもちまして、今回風観岳支石墓群の総括の報告書を上梓できるようになりましたことを、深く感謝申し上げます。

また、調査対象範囲の地権者の皆様には、多年を要したにもかかわりませず調査に対するご快諾とご協力をいただきました。また、関係町内会や関係機関からのご協力なしには今回の報告も成し得なかつたことに鑑み、衷心より感謝申し上げるものでございます。

今回の報告は8年次の総括の意味合いを持つものであります、未だ解明すべき事柄も多く存在しております。今次の報告が今後の研究の指針ともなり得れば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査に際し全般のご協力を賜りました方々に感謝申し上げ、また酷寒・酷暑のなか調査にご従事いただきました皆様に感謝申し上げまして、発刊のことばといたします。

平成18年3月31日

諫早市教育委員会

教育長 峰 松 終 止

例　　言

1. 本書は諫早市破籠井町971及び下大渡野町941外にかけて分布する風觀岳支石墓群の調査報告書である。
2. 調査は平成9年度の第1次調査から平成16年度の第8次調査まで実施した。
3. 本書に使用した支石墓番号は、昭和50年度調査（調査主体は長崎県文化課）時の番号に継承させて使用した。
4. この折、未確定の支石墓とされたものはそのまま3桁の番号を表示している。
5. 今次の調査では、8年次を通じて略記号を使用して調査・整理作業を行ったため、既刊の概要報告書と齟齬をきたさないよう、本文中においては従前の略記号である石棺「S A」や土壙「S B」を括弧書きで使用している。
6. よって今後は、今次の支石墓番号を正式とすることとし、本文中において読み替え表を掲載した。
7. 本報告書には、概要報告書に掲載した支石墓も再度掲載している。これは既報が掲載できなかった図画類があったためで、今回報告分をもって正式な報告書とする。
8. 図面の縮尺は、遺構は原則1/30、遺物については土器が1/2、石器が2/3の縮尺で掲載した。
9. 図中遺構の方位は磁北を示し、また高度値は標高である。
10. 本調査で発掘した遺物、保存記録のために作成した図画類は諫早市教育委員会で整理・保管し、諫早市郷土館で保存・利活用できるようにしている。
11. 本書の執筆は次のとおりであり、編集は秀島が行った。

第1章……………古賀 力・川瀬 雄一

第5章第4節第1項…………橋本 幸男

第4節第2項…………古賀 力

第6章第1節…………パリノ・サーベイ株式会社

第2節……………株式会社 古環境研究所

第7章第2節-1 ……橋本 幸男

第3節……………古賀 力

他は秀島が担当した。

本 文 目 次

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境.....	1
第2章 調査にいたる経緯.....	5
第3章 調査の目的と経過.....	6
第1節 調査の目的.....	6
第2節 調査の経過.....	6
第4章 調査機関と調査指導委員会.....	11
第5章 調査の記録.....	12
第1節 遺跡の範囲.....	12
第2節 遺跡内における遺物の分布.....	13
第3節 検出された遺構.....	25
第1項 A 地点の支石墓と遺構.....	25
- 1. 21号支石墓 (S B 1)	29
- 2. 22号支石墓 (S B 3)	29
- 3. 23号支石墓 (S B 8)	29
- 4. 24号支石墓 (S B 13)	31
- 5. 25号支石墓 (S B 21)	32
第2項 B 地点の支石墓.....	35
第3項 C 地点の支石墓と遺構.....	35
- 1. 5号支石墓 (S A 10)	35
- 2. 18号支石墓.....	35
- 3. 26号支石墓 (S B 7)	38
- 4. 27号支石墓 (S B 9)	38
- 5. 28号支石墓 (S A 1)	39
- 6. 29号支石墓 (S A 2)	40
第4項 D 地点の支石墓と遺構.....	46
- 1. 30号支石墓 (S A 3)	46
- 2. 31号支石墓 (S A 4)	47
- 3. 32号支石墓 (S A 5)	49
- 4. 33号支石墓 (S A 6)	49
- 5. 34号支石墓 (S A 7)	50

－ 6. 35号支石墓（S A 8）	52
－ 7. 36号支石墓（S A 9）	55
－ 8. 37号支石墓（S A 11）	55
－ 9. 38号支石墓（S B 4）	56
－10. 39号支石墓（S B 5）	57
－11. 40号支石墓（S B 6）	59
－12. 41号支石墓（S B 10）	60
－13. 42号支石墓（S B 11）	60
－14. 43号支石墓（S B 14）	60
－15. 44号支石墓（S B 15）	62
－16. 45号支石墓（S B 16）	66
－17. 46号支石墓（S B 17）	66
－18. 47号支石墓（S B 18）	66
－19. 48号支石墓（S B 19）	66
－20. 49号支石墓（S B 20）	69
－21. 50号支石墓（S B 22）	70
－22. 51号支石墓（S B 23）	70
－23. ピット群及び石列	72
－24. ピット群	76
－25. 段差状遺構	85
－26. 土師器土壤	86
第5項 E地点の支石墓	86
－ 1. 52号支石墓（S B 12）	86
第6項 F地点の支石墓と遺構	89
－ 1. 53号支石墓（S B 2）	89
－ 2. 玄武岩露頭	89
第4節 検出された遺物	92
第1項 土器	92
第2項 石器	140
第6章 分析の記録	170
第1節 高級脂肪酸分析	170
第2節 放射性炭素年代測定	175
第7章 総括	182
第1節 支石墓について	182
第2節 土器について	187
第3節 石器について	194

挿 図 目 次

第1図	諫早市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図	3
第3図	周辺遺跡の遺構と遺物	4
第4図	3~6トレンチ遺物出土状況図 (S-1/40)	21~22
第5図	7~18トレンチ遺物出土状況図 (S-1/20)	23~24
第6図	21号支石墓 (SB1) 実測図 (S-1/30)	30
第7図	22号支石墓 (SB3) 実測図 (S-1/30)	30
第8図	23号支石墓 (SB8) 実測図 (S-1/30)	31
第9図	24号支石墓 (SB13) 実測図 (S-1/30)	32
第10図	25号支石墓 (SB21) 実測図 (S-1/30)	33
第11図	C地点支石墓位置相関図 (S-1/600, S-1/60)	34
第12図	5号支石墓 (SA10) 実測図 (S-1/30)	36
第13図	18号支石墓実測図 (S-1/30)	37
第14図	26号支石墓 (SB7) 実測図 (S-1/30)	38
第15図	27号支石墓 (SB9) 実測図 (S-1/30)	39
第16図	28号支石墓 (SA1) 実測図 (S-1/30)	41~42
第17図	29号支石墓 (SA2) 実測図 (S-1/30)	43
第18図	30号~32号支石墓 (SA3~5) 位置相関図 (S-1/30)	43
第19図	D地点トレンチ及び遺構配置図 (S-1/400)	44
第20図	30号支石墓 (SA3) 実測図 (S-1/30)	45
第21図	31号支石墓 (SA4) 実測図 (S-1/30)	48
第22図	33号支石墓 (SA6) 実測図 (S-1/30)	50
第23図	34号支石墓 (SA7)、37号支石墓 (SA11) 実測図 (S-1/30)	51
第24図	35号支石墓 (SA8) 実測図 (S-1/30)	53~54
第25図	36号支石墓 (SA9) 実測図 (S-1/30)	55
第26図	38号 (SB4)・43号 (SB14)・44号 (SB15) 支石墓位置相関図 (S-1/30)	56
第27図	38号支石墓 (SB4) 実測図 (S-1/30)	57
第28図	39号支石墓 (SB5) 実測図 (S-1/30)	58
第29図	40号支石墓 (SB6) 実測図 (S-1/30)	59
第30図	41号支石墓 (SB10) 実測図 (S-1/30)	61

第31図	42号支石墓（S B11）実測図（S-1/30）	62
第32図	43号支石墓（S B14）実測図（S-1/30）	63
第33図	44号支石墓（S B15）実測図（S-1/30）	64
第34図	45号支石墓（S B16）実測図及び石斧出土状況図（S-1/30, S-1/12）	65
第35図	46号支石墓～49号支石墓（S B17～S B20）及び土壤実測図（S-1/30）	67～68
第36図	50号支石墓（S B22）実測図（S-1/30）	69
第37図	51号支石墓（S B23）実測図及び遺物出土状況図（S-1/15, 1/6）	71
第38図	5-5 トレンチ石列及びピット群実測図（S-1/60）	73～74
第39図	5-1・10トレンチ、ピット群実測図（S-1/80）	75
第40図	7-9 トレンチ遺構実測図及び遺物出土状況図（S-1/40）	77～78
第41図	7-10・15・16、8-6 トレンチ、ピット出土状況図（S-1/60）	81～82
第42図	D地点7-18トレンチ段差状遺構実測図（S-1/30）	84
第43図	5-9 トレンチ土壤及び土師器出土状況図（S-1/30）	85
第44図	52号支石墓（S B12）実測図（S-1/30）	87
第45図	53号支石墓（S B2）実測図（S-1/30）	88
第46図	日野見岳玄武岩露頭部測量図（S-1/400）	90
第47図	A地点出土土器実測図（1～11）（S-1/2）	91
第48図	C地点出土土器実測図（1～9）（S-1/2）	93
第49図	D地点出土土器実測図1（1～19）（S-1/2）	95
第50図	D地点出土土器実測図2（20～40）（S-1/2）	97
第51図	D地点出土土器実測図3（41～69）（S-1/2）	99
第52図	D地点出土土器実測図4（70～97）（S-1/2）	101
第53図	D地点出土土器実測図5（98～114）（S-1/2）	103
第54図	D地点出土土器実測図6（115～135）（S-1/2）	105
第55図	D地点出土土器実測図7（136～152）（S-1/2）	106
第56図	D地点出土土器実測図8（153～167）（S-1/2）	108
第57図	D地点出土土器実測図9（168～175）（S-1/2）	110
第58図	D地点出土土器実測図10（176～188）（S-1/2）	111
第59図	D地点出土土器実測図11（189～196）（S-1/2）	112
第60図	D地点出土土器実測図12（197～218）（S-1/2）	115
第61図	D地点出土土器実測図13（219～240）（S-1/2）	117
第62図	D地点出土土器実測図14（241～258）（S-1/2）	119
第63図	D地点出土土器実測図15（259～289）（S-1/2）	121
第64図	D地点出土土器実測図16（290～305）（S-1/2）	123
第65図	E地点出土土器及び中・近世出土遺物実測図（S-1/2）	124
第66図	F地点出土土器及び縄文土器実測図、出土錢貨拓影（S-1/2）	126

第67図	D地点出土土器実測図・土師器1 (1~14) (S-1/2)	128
第68図	D地点出土土器実測図・土師器2 (15~20) (S-1/2)	129
第69図	石器実測図1 (1~64) (S-2/3)	146
第70図	石器実測図2 (65~96) (S-2/3)	150
第71図	石器実測図3 (97~112) (S-2/3)	153
第72図	石器実測図4 (113~136) (S-2/3)	155
第73図	石器実測図5 (137~162) (S-2/3)	157
第74図	石器実測図6 (163~173) (S-2/3)	159
第75図	石器実測図7 (174~179) (S-2/3)	161
第76図	石器実測図8 (180~192) (S-1/3)	163
第77図	石器実測図9 (193~201) (S-1/3)	165

別 図 目 次

- 1 風観岳支石墓群トレンチ配置図 (S-1/1,000)
- 2 風観岳支石墓群支石墓及び上石分布図 (S-1/1,000)

表 目 次

第1表	D地点年次別トレンチ配置概念図	15
第2表	D地点石核分布概念表・図	16
第3表	D地点剥片分布概念表・図	16
第4表	D地点削片分布概念表・図	17
第5表	D地点使用痕のある剥片分布概念表・図	17
第6表	D地点搔・削器分布概念表・図	18
第7表	D地点石鏃分布概念表・図	18
第8表	D地点出土土器分布概念表・図	19
第9表	D地点丹塗り土器分布概念表・図	19
第10表	D地点角閃石入り土器分布概念表・図	20
第11表	風観岳支石墓群検出遺構一覧表	26
第12表	支石墓読み替え表	27
第13表	支石墓属性一覧表	28
第14表	土器観察表1	131
第15表	土器観察表2	132

第16表	土器観察表3	133
第17表	土器観察表4	134
第18表	土器観察表5	135
第19表	土器観察表6	136
第20表	土器観察表7	137
第21表	年次別・トレンチ別出土土器集計表1	138
第22表	年次別・トレンチ別出土土器集計表2	139
第23表	第1~8次出土石器組成一覧表1	141
第24表	第1~8次出土石器組成一覧表2	142
第25表	石器形態分類図、表及び風観岳支石墓群・下峰原高場遺跡出土石器比較表	144
第26表	石器実測一覧表1	166
第27表	石器実測一覧表2	167
第28表	石器分類表1	168
第29表	石器分類表2	169

図 版 目 次

卷頭	－1 風観岳支石墓群F地点玄武岩の露頭状況（西から）	－2 同（東から）
1	－1 21号支石墓（東から）	－2 同内部主体（西から）
2	－1 22号支石墓（南東から）	－2 同内部主体（南東から）
3	－1 23号支石墓（南東から）	－2 同上石除去後（北東から）
4	－1 24号支石墓（東から）	－2 同上石除去後（上手石材下に土壤がある）
5	－1 25号支石墓上石と内部主体（西から）	－2 同土壤断面（西から）
6	－1 26号支石墓（北から）	－2 同内部主体（東から）
7	－1 27号支石墓（北東から）	－2 同内部主体（北西から）
8	－1 27号支石墓（東から）	－2 28号支石墓と5号支石墓（西から）
9	－1 28号支石墓蓋石1層目の状況（南から）	－2 同内部主体（西から）
10	－1 28号支石墓内部主体（北から）	－2 29号支石墓（東から）
11	－1 30号支石墓（東から）	－2 同蓋石2層目の状況（南東から）
12	－1 30号支石墓蓋石（石棺直上）（東から）	－2 同内部主体（南東から）
13	－1 31号支石墓上石（東から）	－2 同蓋石1層目の状況（南東から）
14	－1 31号支石墓蓋石2層目の状況（南東から）	－2 同蓋石（石棺直上）（南東から）
15	－1 31号支石墓蓋石除去後（南から）	－2 同内部主体（南から）
16	－1 33号支石墓蓋石（北西から）	－2 同内部主体（東から）
17	－1 33~37号支石墓近景（北から）	－2 34号支石墓（北から）

- 18 - 1 34号支石墓（東から） - 2 同内部主体（東から）
19 - 1 35号支石墓（北西から） - 2 同上石の状況（北から）
20 - 1 35号支石墓上石除去後（北から） - 2 同蓋石1層目の状況（北西から）
21 - 1 35号支石墓蓋石（石棺直上）（北から） - 2 同内部主体半掘状況（北から）
22 - 1 35号支石墓内部主体（北から） - 2 同内部主体（西から）
23 - 1 36号支石墓（南東から） - 2 同上石（北東から）
24 - 1 38号支石墓（南西から） - 2 同上石（北西から）
25 - 1 38号支石墓磨製石斧出土状況（北西から） - 2 同土壤検出状況（西から）
26 - 1 38号支石墓内部主体半掘（北西から） - 2 同内部主体半掘（南東から）
27 - 1 39号支石墓（北西から） - 2 同蓋石（北西から）
28 - 1 39号支石墓蓋石除去後（北西から） - 2 同内部主体半掘（南から）
29 - 1 40号支石墓内部主体（南西から） - 2 同内部主体半掘状況（北東から）
30 - 1 41号支石墓（北東から） - 2 同内部主体（南西から）
31 - 1 42号支石墓（西から） - 2 同内部主体（西から）
32 - 1 43号支石墓（東から） - 2 同上石除去後（南東から）
33 - 1 43号支石墓内部主体（南から） - 2 同内部主体（北西から）
34 - 1 44号支石墓（南東から） - 2 同上石除去後（南東から）
35 - 1 44号支石墓上石下の礫出土状況（南東から） - 2 同内部主体（南東から）
36 - 1 45号支石墓（東から） - 2 同上石除去後（南東から）
37 - 1 45号支石墓上石下の礫出土状況（東から） - 2 同石斧出土状況（北から）
38 - 1 46~48号支石墓（南から）
- 2 同支石墓群と7-1トレンチ北壁（南から）
39 - 1 49号支石墓（南から） - 2 同内部主体の状況（南から）
40 - 1 49号支石墓内部主体断面（南東から）
- 2 49号支石墓及び8-2トレンチ北壁土層断面（南から）
41 - 1 50号支石墓（西から） - 2 同支石墓と7-10トレンチ全景（西から）
42 - 1 51号支石墓（南東から） - 2 同支石墓壺形土器検出状況（南から）
43 - 1 51号支石墓壺形土器検出状況（南から）
- 2 同内部主体及び石器（178）出土状況（西から）
44 - 1 52号支石墓（北から） - 2 同内部主体（北から）
45 - 1 53号支石墓（西から） - 2 同内部主体（東から）
46 - 1 5-5トレンチ石列全景（南東から） - 2 同石列東側基礎部分土層断面（東から）
47 - 1 5-5トレンチ石列西側基礎部分土層断面（西から）
- 2 5-9トレンチ土師器土壙（南西から）
48 - 1 5-1トレンチ、ピット群検出状況（西から） - 2 5-10トレンチ全景（南西から）
49 - 1 7-9トレンチ全景（西から）

- 2 7—9・7—18トレンチ段差状遺構（北から）
- 50 — 1 7—18トレンチ西壁と段差状遺構（西から） — 2 7—18トレンチ段差状遺構（北から）
- 51 — 1 18号支石墓（北東から） — 2 同上（南西から）
- 52 — 1 7—10・11トレンチ全景（北から） — 2 7—16トレンチ、ピット検出状況（東から）
- 53 — 1 F地点玄武岩露頭の状況（東から） — 2 同上（西から）
- 54 — 1 28号支石墓覆土堆積状況（東から） — 2 同上（北から）
- 55 — 1 30号支石墓覆土堆積状況（南から） — 2 31号支石墓覆土の状況（西から）
- 56 — 1 31号支石墓覆土堆積状況（東から） — 2 35号支石墓覆土堆積状況（東から）
- 57 — 1 35号支石墓覆土堆積状況（北から） — 2 51号支石墓覆土堆積状況（北から）
- 58 — 1 A地点出土土器（1～11） — 2 C地点出土土器（1～9）
- 59 — 1 D地点出土土器（1～15） — 2 D地点出土土器（16～40）
- 60 — 1 D地点出土土器（41～69） — 2 D地点出土土器（70～97）
- 61 — 1 D地点出土土器（98～114） — 2 D地点出土土器（115～135）
- 62 — 1 D地点出土土器（136～152） — 2 D地点出土土器（153～167）
- 63 — 1 D地点出土土器（168～182） — 2 D地点出土土器（183～188）
- 64 D地点出土土器（189～196）
- 65 — 1 D地点出土土器（197～218） — 2 D地点出土土器（220～240）
- 66 D地点出土土器（219）
- 67 — 1 D地点出土土器（241～253） — 2 D地点出土土器（254～258）
- 68 — 1 D地点出土土器（259～263） — 2 D地点出土土器（264～268）
- 69 — 1 D地点出土土器（269～274） — 2 D地点出土土器（275～280）
- 70 — 1 D地点出土土器（281～286） — 2 D地点出土土器（287～291）
- 71 — 1 D地点出土土器（292～297） — 2 D地点出土土器（298～305）
- 72 — 1 E地点出土土器（1～15）、F地点出土土器（1～8）
- 72 — 2 中世の資料（16）、近世の資料（17～19）、銭貨（1～6）、
縄文土器（1～3）弥生土器（1）
- 73 — 1 D地点出土土師器（1～14） — 2 D地点出土土器（15～20）
- 74 — 1 石器（1～20） — 2 石器（21～40）
- 75 — 1 石器（41～60） — 2 石器（61～80）
- 76 — 1 石器（81～96） — 2 石器（97～107）
- 77 — 1 石器（108～113） — 2 石器（114～124）
- 78 — 1 石器（125～139） — 2 石器（140～159）
- 79 — 1 石器（160～171） — 2 石器（172～177）
- 80 — 1 石器（178～179） — 2 石器（180～192）
- 81 — 1 石器（193～201） — 2 組織痕土器の陽転
- 82 土器器面調整の痕跡

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の立地と環境

諫早市は長崎県本土部のはば中央部に位置し、長崎半島、西彼杵半島、島原半島の結節するところにあって東は有明海・西は大村湾・南は橘湾の三方を海に面した地峡部にある。風観岳支石墓群は大村市と接する諫早市西部にあって、東経 $130^{\circ} 0' 56''$ 、北緯 $32^{\circ} 52' 26''$ を測り、標高236mの風観岳南側の鞍部（日野見峠）を中心にした一帯に位置する。地質的には古第三紀層の基盤を玄武岩が被覆して溶岩台地を形成し、その後の侵食により丘陵化したものである。山頂には典型的な板状節理を呈する玄武岩の露頭が見られ、付近一帯には支石墓の上石として用いるに適した石が多数見られ、支石墓造営に際しての石材供給地として格好の地であったと思われる。

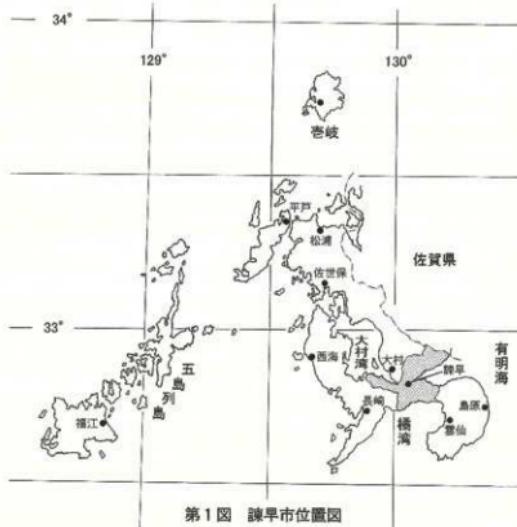
支石墓群の立地としては、県北地域の大野台・狸山・小川内の各支石墓群のように、海岸線あるいは平野部を望む標高25~60mの低丘陵上というのが一般的であるが、それに比較して風観岳支石墓群は、県南地域の原山支石墓群（標高250m）と同じく標高の高い所に立地する点が特徴である。また長崎県本土地域における支石墓は県北と県南に分布する傾向がみられたが県央に風観岳支石墓群が位置することによって支石墓分布の空白を埋めることとなった。

江戸時代に長崎～小倉間を結んだ長崎街道は諫早永昌宿より北進して風観岳の麓、下大渡野町付近から緩やかに上り本遺跡が所在する日野見峠を経て大村藩領に入る、この間約1.5kmの間は「大村街道」の名称で昭和52年に市の史跡として指定している。長崎街道の中でも往時の面影が特に良く残った地点で、江戸時代の旅人の気分を味わいながらの自然散策路として親しまれている。支石墓は、自然と歴史に満ちた緑豊かな山あいに眠っているのである。

第2節 歴史的環境

と周辺の遺跡

長崎街道は、江戸と長崎を結ぶ往還として九州の入口小倉と長崎間に設けられた九州で最も重要な街道であり、長崎奉行・幕府の役人・諸大名・オランダ商館



第1図 謞早市位置図

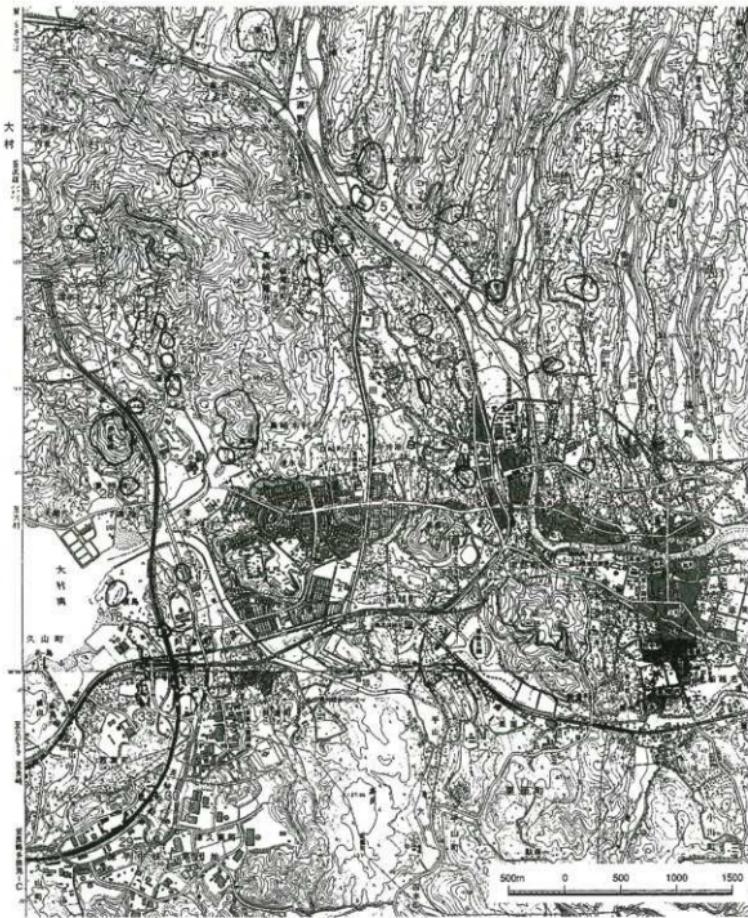
長・商人・文人・維新の志士が、さまざまな思いを胸に往来し、新しい日本を生み出す大動脈とも言える街道であった。先述の市指定史跡「大村街道」は諫早（佐賀藩諫早領）～大村（大村藩）間の峠道で、この峠は、太田南畠『小春紀行』（1805・文化2年）には「日の尾峠」、古河古松軒の『西遊雑記』（1783・天明2年）・伊能忠敬『測量日記』（1812・文化9年）には「日野峠」と記されている。諫早側から峠（市境）に至るほど中間地点には「佐賀藩日野（大渡野）番所跡」が残っている。本遺跡の北西隅に大村藩鈴木村と佐賀藩諫早領破籠井村・大渡野村の三方を画する塙があり、「三方塙」と呼ばれている。規模は一辺がおよそ4.5mの三角形で、最大の藩境塙である。大村藩と佐賀藩諫早領の境を画する積石塙は、佐賀藩諫早領側が四角塙、大村藩側が丸塙を交互に築き、『大村郷村記』によると塙数108となっているが現存は35基ほどが残っている。滅失したものが多いなかに三方塙を中心に本遺跡周辺では旧態をよく残している。

風鏡岳の麓、長崎街道の上り口には、下峰原遺跡、下峰原高場遺跡の両遺跡が存在する。下峰原遺跡は昭和49年に諫早バイパス（現在の国道34号線）建設に伴い長崎県教育委員会が、また平成8年に長崎県住宅供給公社による諫早西部団地造成に伴い諫早市埋蔵文化財調査協議会がそれぞれ発掘調査を実施している。下峰原遺跡は旧石器～縄文時代にかけての遺跡で、縄文晩期中葉の埋壺2基が検出され、また縄文晩期の突蒂文土器も出土しており、風鏡岳支石墓群との遺跡相互間の関連を窺わせる遺跡群である。下峰原高場遺跡は平成12年に諫早西部団地造成に伴い諫早市埋蔵文化財調査協議会が発掘調査を実施している。旧石器～縄文時代にかけての遺跡で、旧石器を主体とし、ナイフ型石器・台形石器・細石刃など3万点を越える遺物が出土している。この遺跡では扁平な小振りの石の下に、刃部を外側に向けた局部磨製の扁平な石斧が確認された。下部に明確な土壙などの遺構は確認されなかったものの、風鏡岳支石墓群38号支石墓や、45号支石墓との関連が想定される。

古墳時代初頭には、風鏡岳の麓を南流する本明川対岸に本明石棺群（昭和52年市指定史跡）が所在し、石棺6基があって、棺内から刀子などの鉄製品や土器などが出土している。

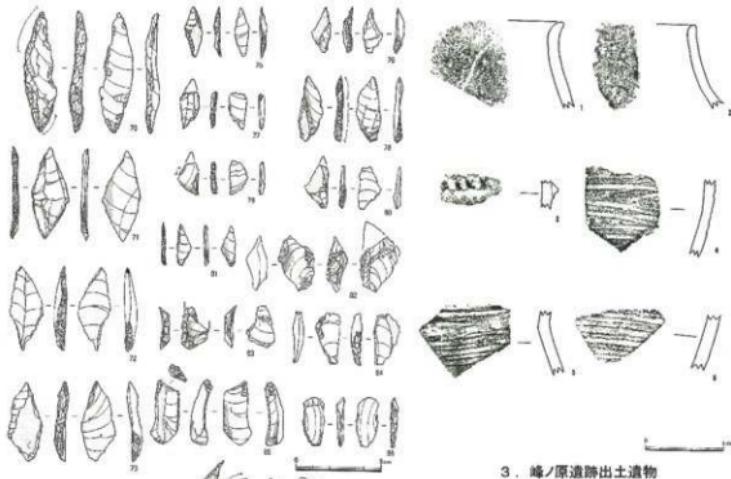
律令期には官道である西海道が旧藩時代の長崎街道とはほぼ同じルートを通っていたと言われているが、現在のところ明らかにし得ない。

中世期には、大村領に接するという地理的・軍事的要因から、周辺にいくつかの城が築かれる。尾和谷城（開城）は、諫早を領した西郷純堯の部将尾和谷軍兵衛が拠ったとされる。長崎県施行の中山間総合整備事業に伴い、諫早市教育委員会が平成11年度・12年度・14年度に発掘調査を実施し、建物遺構や青花・青磁などの遺物が出土した。真崎城は同じく西郷氏の支城として、戦略拠点である津水港に近接して築かれ、大村氏の伊賀峰城に相対する番手城の役割をもつものである。土壙や空堀などが良好な状態で残っている。平松城は本明川を挟んだ対岸にあり土壙・石壙・豊堀などがコンパクトに配され、厳重な構造を備えた中世山城である。平成4年度に周辺の畠場整備が計画され、試掘調査を実施した際に青磁などが出土したが本格的な調査は未了で詳細は明らかでない。

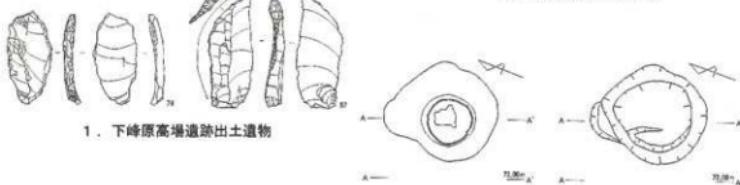


- | | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|
| 1 鳳翫岳石墓群（繩文・弥生） | 12 上模址遺跡 | 23 多々良川B遺跡（旧石器・縄文） |
| 2 下原原遺跡（旧石器・縄文） | 13 折山頭遺跡 | 24 多々良川A遺跡（縄文） |
| 3 上原原遺跡（旧石器・萬古・近世） | 14 全谷遺跡 | 25 萬蓮寺遺跡（旧石器・縄文） |
| 4 平松城跡（中世） | 15 真崎城跡（中世） | 26 迫ノ山遺跡（旧石器～弥生） |
| 5 平松城根小屋跡（中世） | 16 真崎西遺跡（旧石器） | 27 伊賀城跡（中世） |
| 6 尾山城跡（中世） | 17 西佐竹遺跡（縄文） | 28 溝陰遺跡（旧石器・縄文） |
| 7 本明B遺跡（古墳） | 18 貝塚横島B遺跡（縄文） | 29 鹿野遺跡（包） |
| 8 本明石棺群（市指定）（古墳） | 19 浜田遺跡（旧石器・縄文） | 30 西輪原遺跡（包） |
| 9 八天下遺跡（旧石器～弥生） | 20 下峰原高場遺跡（旧石器・縄文） | 31 牛込B遺跡（包） |
| 10 上打越遺跡（旧石器） | 21 鹿島遺跡（旧石器・縄文） | 32 鶴ノ倉遺跡（包） |
| 11 永昌遺跡（縄文） | 22 善福寺遺跡（旧石器・縄文） | 33 千祐遺跡（包） |
| 12 春昌遺跡（縄文） | | |

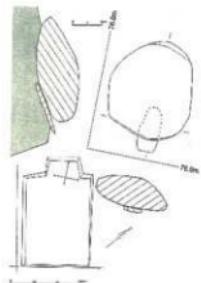
第2図 周辺遺跡分布図



3. 峰ノ原遺跡出土遺物



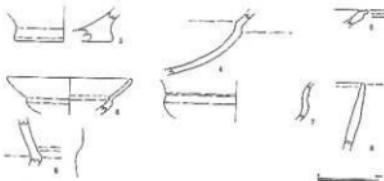
1. 下峰原高塚遺跡出土遺物



2. 下峰原高塚遺跡石斧出土状況



4. 下峰原遺跡A地点1号埋甕実測図



5. 下峰原遺跡出土遺物

第3図 周辺遺跡の遺構と遺物

第2章 調査に至る経緯

風鶴岳支石墓群が確認されたのは昭和45年である。この年の2月に長崎県と大分県を結ぶ九州横断高速自動車道（現長崎自動車道）の構想が公表されている。この計画を受け長崎県文化課は同年国庫補助事業として予定路線内の埋蔵文化財の分布調査を各関係市・町教育委員会の協力を得て実施した。予定路線は大村湾東岸の3市2町を南下する路線であり、その折の分布調査結果は『大村湾東岸地点分布調査』として概要報告書が刊行されている。

分布調査での最大の成果は、本支石墓群の発見であった。約10基が長崎街道を挟む鞍部に分布し、A地点、B地点の2箇所に群在するとされた。この発見は県北に分布する大野台支石墓群、狸山支石墓群、里田原支石墓群などの支石墓群と県南に分布する原山支石墓群とを結びつける結節点の役割を果たした。

その後、昭和46年2月に支石墓群の分布する位置図の作成が行われて保護に努めていたが、昭和49年にいたって支石墓のうち数基が損壊していることが判明した。そこで、県文化課の主導により県文化財専門委員、市教育委員会と現地調査を行い、支石墓の確認調査と保護策の策定とその実施が指摘された。

これを受けて、昭和50年地形測量と基數確認及び一部遺構の調査が実施された。調査は国庫補助事業として実施され、事業主体が諫早市、調査実施主体を県文化課が担当することとなった。

この調査の結果、支石墓が分布する地点はA・Bの2地点に分布し、それぞれ33基、2基が群在することが確かめられた。また下部構造の調査も合わせて実施され、第3号、第8号支石墓がその対象となった。ともに土壤を内部主体とする支石墓で、第3号には支石が4個確認されたが、第8号では支石の確認はなされなかった。またボーリングステッキによる表面調査が実施され、内部主体が土壤と共に石棺を採用している例が多数に上ることも確認された。また、調査終了時に、畠の側溝中で確認された第7号（内部主体は箱式石棺）の保護作業実施中、上石下から供献された状態の土器群の検出がなされている（第48図6～9）。以上により、本支石墓群は土壤と箱式石棺を内部主体とする2支群をもつ支石墓群であることが確認されたのである。

降って平成9年、本文支石墓群のもつ学術的価値は十分に認識され、研究者間の研究素材としての位置は確固たるものであったにもかかわらず、支石墓そのものの活用についての方途が取られていなかった。

そこで、再度入念な調査を実施し、その実態の解明を行うべく支石墓群の調査の事業計画を立てたのが、今回の調査である。

当初は3年間の継続事業として計画したが、対象範囲が広大であること、明確な支石墓群の立地範囲の確定と境界の設定、支石墓群の造営時期の明確化と群の構成と遷移、造営当初の支石墓群の規模の想定など解明すべき要素が多岐にわたり、さらに進化したことにより最終的に第8次まで調査を延伸して実施することとなった。

第3章 調査の目的と経過

第1節 調査の目的

風観岳支石墓群の現地調査は、第1次から第8次までの8年次にわたる調査であった。支石墓が分布する一帯は植林や畠地としての潜在力に富むものの、交通アクセスや木材としての相対的価値の遞減によって利・活用の頻度が低下していたのは昭和50年以降の時流であった。またこのことが幸いして遺跡の保存度が遞減することなく経年したことは、文化財保護の見地からは好条件であった。

調査は昭和50年度に実施された調査箇所を含む範囲での支石墓の分布範囲の確定と、支石墓の群としての構成とその内容、支石墓の構造の把握、造営時期の明確化を主目的に実施することとした。このため調査に際しては、将来の詳細調査及び再調査の実施の可能性を残すため遺構の完掘は行わず、できるだけ保存する方向性で実施することとした。

当初支石墓群の確認調査は3年度の継続事業として企画・立案し、実施することとした。しかし、調査の進捗に従い3年次でのD地点における遺物出土の量の多さと、出土石器・土器の器種の多様さは、本遺跡が単に墓域としての支石墓造営に係る要素を有するのみでなく、生活或いは生産関連遺構の存在をも想定させるものであった。このことにより調査目的の新たな追加・設定と、詳細調査の遂行を目的に調査年次を2年次延伸して実施することとした。

4・5年次の調査は生活域の捕捉と、支石墓主体の埋葬域の関連を闡明化することを目的として、範囲を拡大して実施することとした。5年次ではD地点における多量の遺物出土と柱穴様ピットの検出により生活域の存在が十分に想定されたにも拘らず十分に捕捉できず、調査年次を再度延伸して実施することとした。

6～8次調査においては5年次に統いて生活関連遺構の把握に努めたが、限られた調査範囲内での捕捉は困難を極め、今後の調査に期待を寄せる結果となった。隣接する大村市域を含めての今後の課題である。

本遺跡は縄文時代晚期終末当時の集落に伴う墓地として機能したのみならず、縄文時代晩期中葉頃には生活域として機能し、爾後共同体の墓地として利・活用されたことは遺物などの面から明らかである。本遺跡の遺跡利用形態の遷移の観点からもさらに追及されるべき遺跡であることは今回の調査結果からも明らかとなった。

第2節 調査の経過

風観岳支石墓群の現地調査の経過を以下、年次ごとに抄録する。

第1年次（平成9年度）

平成9年8月6日から現地調査を開始する。

初年度は長崎街道両脇の部分について遺跡の範囲確認を目的に実施することとした。まず長崎街道南側のA地点（本報告C地点）の除草作業から始め、全体の地貌が分かるまで実施した。その後トレンチ（1-01）を設定し、調査を始める。表層土を除去すると2層の茶色土が現れ、

下位に安山岩風化疊泥じりの土となる。2層は他地点の褐色土と異なり、地山の土の風化土で粘土化したものであり、かなりの程度物理的な浸食を受けていることが判明した。昭和50年度調査のNo19・20号を確認する。26号支石墓（S B 7）上石実測・写真撮影を行い、上石を除去する。上石下には拳大の石が多く集積しており、また上石より一回り大きな掘り形を検出する。上石は支石3個でほぼ水平位に支えていることが判明する。土壤上面での実測・写真撮影を実施して終了し、以下は現状のまま保存することとした。街道北側B地点にB-1トレンチ設定。B地点は土層が深く、またかなりの程度攪乱を受けていることが判明する。B地点から東に80mほどの旧畑をC地点（本報告E地点）としてトレンチを2本設定。表土から70cm程で地山の赤色粘土に当たる。また、A地点で県調査5号に隣接して28号支石墓（S A 1）を確認。上石実測・写真撮影後上石を除去する。組合せ式の箱式石棺を内部主体とする支石墓であることが判明。1-3トレンチに隣接して27号支石墓（S B 9）を確認。長三角形の上石下に、楕円形の土壤を内部主体とする支石墓であることが判明。街道南側で県調査18号の下方にD地点としてトレンチを設定。遺跡の限界を調査するためであったが、地形は浅い谷状を示し遺跡の範囲内ではないことを窺わせた。

初年度は13本のトレンチを設定し、また支石墓確認場により207m²の調査を行い、10月8日に終了した。

第2年次（平成10年度）

8月17日から調査を開始する。初年度に隣接して風観岳の尾根筋までを調査の対象地（本報告ではA地点、F地点）とした。このため尾根筋の南側の斜面が主たる対象地である。初年度同様草払いから実施する。県調査1号が所在する畑にトレンチ（E-1～5）を設定する。表層土以下は黒色土の堆積が深く、明確な遺構の確認はなされなかった。南斜面部から稜線上にかけてトレンチを設定し調査を行うが、斜面部には桧の植林がされているためトレンチが狭小とならざるを得ず、また林間の木漏れ日での確認であるため、遺構の確認が困難を極めた。このような条件下であったが、多数の上石様板状石の存在は支石墓立地の蓋然性を強くした。周辺に存在する板状石を実測し、写真撮影を行った後上石を除去すると原位置を離れたと思われる石が意外なほど多く、事実25号支石墓（S B 21）は上石が下方に反転・移動され、内部主体が不明確な土壤状を示すほどになっていた。植林或いは後世の攪乱によって上石が移動しているものが多数見られたのである。この斜面部においては21号・22号支石墓が原位置で確認された。ともに土壤を内部主体とし、地山の安山岩風化疊泥が土壤内に埋め戻されていた。平坦面周縁（本報告F地点）でわずかに53号支石墓（S B 2）が確認されたのは、この地点まで支石墓造営が行われていたことを窺わせるものであり、重要な確認であった。また平坦面から東側斜面部にかけて豈2～4枚ほどの玄武岩の露頭があり、また露頭周縁には散乱した小さな板状石が見られることにより、支石墓上石はここから切り出されたことを劈裂させた。2年次は18本のトレンチ調査を行い、またボーリング調査を行って支石墓確認を実施し、述べ181m²の調査を行って10月29日に終了した。

第3年次（平成11年度）

7月28日から現地作業開始。長崎街道南側（本報告D地点）を調査対象範囲として伐採・除草作業を行う。また最終年度ということもあり、既掘範囲をも含めてのトレンチ設定を行う。D地点稜線上平坦部から北斜面にかけて3-1～10トレンチを設定し、調査を開始する。3-9トレンチにおいて28号支石墓（S A 1）に隣接して29号支石墓（S A 2）を確認。痕跡程度に内部主体を残すのみで、上石も反転・移動されていた。平坦部東側において30号支石墓（S A 3）を検出。実測・写真撮影を繰り返しながら精査を行う。組合せ式の箱式石棺であることが判明し、また石棺内には土壤掘削時の安山岩風化土が再埋土されている状態が確認され、内部主体は異なるものの第1年次調査の支石墓と同様な葬法であることが理解された。また平坦部に設定した3-15トレンチから多量の遺物が出土し、これはまた2層の包含層出土であることから、単に墓域に伴う遺物であるとは思考しがたい様相を示していた。2年次調査のE地点（本報告E地点）に30トレンチを設定し、上石を実測・写真撮影後移動させる。上石下に礫が多出し、また遺物の確認がなされるものの内部主体の検出が困難を極め、土壤墓であろうと想定された。3年次においては6基の支石墓と遺物の集中地点を確認した。このことにより、本遺跡における墓域と生活域の関明化ということが新たな視点として認識され、調査年次を延伸して実施することとし、10月15日で調査を終了することとした。調査面積は396m²である。

第4年次（平成12年度）

12月4日から調査を開始した。4年次は範囲確認で十分でなかった2次部分（本報告A地点）を主体に行い、3次の補足を実施した。また稜線から南へ高度を逕減する部分で、かつて小さな石棺が存在したということにより、斜面部の調査を実施した。旧藩時代の亭保頃築造された境塚近くで24号支石墓（S B 13）を確認。かなりの程度損壊していたが、上石下部に浅い土壤を確認したことにより支石墓と認定。その後、風観岳稜線上の調査に掛り除草作業から開始した。先年の台風17・19号による植林被害は大きく、径30cmほどに生育した桧材の多くが体幹中ほどから折損していた。このため二次林形成の初段階である雑草の繁茂が甚だしく、除草すら困難な状況であった。除草後はかなり広い平坦面が存在していたので、2×10mほどのトレンチを設定して調査を行った。しかし、この部分は明治初年頃開墾して運動場を敷設したことであり、事実基底部まで搅乱が及んでいた。調査面積483m²を調査し、平成13年2月27日調査を終了した。

第5年次（平成13年度）

7月10日から調査を開始する。3年次調査地点を含めた部分を中心に調査を実施した。3年次ではD地点の最高位部分に限定せざるを得なかつたため、今次はこの地点における東限の確認と、生活関連遺構の検出を目的に実施した。支石墓は5-4トレンチで箱式石棺を主体とするものを3基検出し、3年次調査分と合わせて10基前後が集中することが判明した。また周縁部で移動された支石墓上石を8基調査した。このD地点には山中に東に延びる小道が敷設され

ており、小道の終点には破籠井町が旧藩時代から祭祀している「風綱さん」がある。この小道を挟んで除草を行い、トレンチを設定することとした。5-1・5-10トレンチで柱穴様ピットを17本確認するが、明確な壁面の立ち上がりなど住居跡の属性の確認ができなかった。ピットからは縄文晚期前半の土器片がわずかながら出土し、当該期以降の所産であることは明白である。また小道終点付近の5-9トレンチからは若干の古式土器を出土する浅く不定形の土壤を確認し、当該期まで遺跡の活用がされていたことを窺わせた。このトレンチを東限として遺構の確認はなされず、また標高も過減する傾向にある。5-6~8トレンチでは遺構・遺物の確認がなされず、遺跡の限界を示唆しているものであろう。593m²を調査して10月11日終了した。

第6年次（平成14年度）

10月1日から調査を開始し、第5年次に統いてD地点の調査を継続すべく5-10トレンチに縁接して6-1~3トレンチを設定した。トレンチからはピット16本を検出したが、遺物の出土がなく所属の時期が不明である。5年次設定した5-5トレンチのピット群精査のため排土を行って範囲を拡張したところ、標高下位から石列が確認された。玄武岩板状石を2段ほど積み上げて5m程の列をなすが、南北罐は標高の高いほうに曲がり込んだりせずに直線的に切れている。ピット群の東方下位に当たっているが、双方の関係は不分明である。5トレンチ西北側に拡張した部分から51号支石墓（S B23）が確認された。5年次調査の端部に当たっていたため5次では地山と見做していた。周辺には安山岩の表皮部分に風化膜が付着した塊石が多く存在するため、人為により移動した石と地山の石の判別が困難であった。このためこれら石材を除去し、安山岩風化土の再堆積土の精査を行った。このトレンチでは地山の安山岩風化土が再堆積して包含層となっており、5次調査では事実この層を剥除してピットが確認された。果たして精査によって壺の確認がなされ支石墓の内部主体である土壤が確認されたのである。支石は2個確認されたものの上石は失われていた。東西走する小道の南側にトレンチ（6-4~6）を設定して調査を行うが遺構は確認されず、遺物は多量に検出される。遺跡の南の限界であることを想定しながら12月25日調査を終了する。調査面積は408m²であった。

第7年次（平成15年度）

9月9日調査開始。6年次のデータを基に小道及び南側にトレンチを設定する（7-1、2）。7-1トレンチ北側に径1.4m、厚さ30cm程の玄武岩板状石が検出される。支石墓の存在が想定されたためこの石の北側・小道中に7-3トレンチを設定する。また7-2トレンチの北側にも同様の上石様石が検出され、同じく7-4トレンチを設定し調査を行った。果たして7-4トレンチからは地山面で円形の土壤が確認され、これが南側に移動した上石の内部主体と想定されたため40号支石墓（S B6）とした。しかし西側の上石様大石の内部主体は確認されず、小道敷設に伴って破壊されたか、或いは玄武岩板状石がかなりの距離を移動したかのいずれかであろうと推察された。小道に設定した7-3、4、10トレンチは加圧によってかなり硬く締

まっていた。2層の茶褐色土は薄く、下位は安山岩風化土の再堆積土であるようだ。この層からは遺物や炭化物が多く見られ包含層である。この層の上面で遺構様のプランが看取されたが、後日の遺物分布及び層位の検討で包含層が斜位に堆積した結果の現象であったことが判明した。7-10トレーニングから北側に伸びるトレーニングを7-11、16トレーニングとして設定。7-16トレーニングからは15本の柱穴様ピットを検出した。C地点に面した北斜面部に7-9トレーニングを設定。一部5-4トレーニングと重複している。このトレーニング北側で遺物の集中地点が見られ、かつピット4本の確認もなされる。トレーニング中程にはほぼ東西走る不規則な石列が看取され、段差部分も見られる。このトレーニングで精査中、磨製石斧を検出。小さな上石状の下部から出土しており、この時点までは先年下峰原高場遺跡で確認した遺構と同様のものであろうと想定した。周辺からも遺物の出土が見られるため精査を行ったところ土壙を内部主体とする支石墓(38号、SB4)であることが判明した。今次の調査では生活関連と思われる遺構の検出はなされるもの未だ確認は得られない状況である。調査期間中に文化庁査定官来跡。遺跡視察の後、調査指導を受ける。第7年次までの調査における問題点や課題を総括し、その捕捉を行うことから調査指導委員会を組織し、現地調査等を実施して調査の完遂を企図することとした。平成16年3月5・6日、第1回の調査指導委員会を開催し、現地において貴重な調査指導を受けた。1月15日調査終了。調査面積は470m²であった。

第8年次（平成16年度）

7月26日調査開始。D地点の7年次調査7-9、18トレーニング調査継続のため埋土除去作業から始める。7-9トレーニングの段差や18トレーニング東壁に地山の安山岩風化土が見られない部分があり、北側下位にかけて遺構が存在する可能性があるため7-9、18トレーニングに縁接して8-1トレーニングを設定した。また南斜面に7-1、2トレーニングとの土層対比のため8-2トレーニングを設定する。平坦部に遺構確認トレーニングとして8-6トレーニングを設定。8-2トレーニングでは7-10トレーニングの包含層（淡黒褐色砂質土）が堆積しており、遺物を含みながらトレーニング中位で消滅し、7-1トレーニングまでは延びていない。中位以下は2層である茶褐色土、3'層の茶色土が低位にかけて堆積し、以下は玄武岩風化土である赤っぽい土層に接している。8-2トレーニングで精査中、玄武岩小板石や二抱え大の上石様石材が確認され、46号～48号支石墓(SB17～19)とした。これは5号支石墓(SA10)、45号支石墓(SB16)など主体部上に小板石を集積している例があることによる。また同トレーニングからは7-10トレーニングに寄った部分で土壙が確認され、遺物や炭化物などが確認されたことにより49号支石墓(SB20)と認定した。この上石と思われるものは、7-10と8-2トレーニングの接する部分に存在する玄武岩上石様石材の可能性が最も高いと想定された。この内部主体と考えられる土壙は4層である茶色粘質土を掘削して作られており、上位には3'層、3層が堆積しており、幾分搅乱を受けていると見られた。現地調査を11月10日に終了した。調査面積は148m²であった。

調査指導委員会は調査期間中の8月24・25日に開催して調査方法等についての指導を受け、また、調査終了後の12月13日に開催して整理方針等について指導をいただいた。

第4章 調査機関と調査指導委員会

風鶴岳支石墓群発掘調査の実施機関は以下のとおりである。

諫早市教育委員会

教 育 長	立山 司 (H 9. 4. 1 ~ H12. 9. 30)	前田 重寛 (H12.10. 1 ~ H16. 9. 30)
	峰松 終止 (H16.10. 1 ~)	
教育次長	田中 司郎 (H 9. 4. 1 ~ H10. 8. 31)	崎田 晃生 (H10. 9. 1 ~ H11. 3. 31)
	田嶋 将 (H11. 4. 1 ~ H14. 3. 31)	田鶴 俊昭 (H14. 4. 1 ~ H17. 4. 30)
文化課長	國井 政武 (H 9. 4. 1 ~ H14. 3. 31)	下川 政子 (H14. 4. 1 ~ H16. 3. 31)
	松本 玉記 (H16. 4. 1 ~)	
課長補佐	山田 豊 (H 9. 4. 1 ~ H10. 3. 31)	下川 政子 (H10. 4. 1 ~ H11. 3. 31)
	山口 廣義 (H11. 4. 1 ~ H15. 3. 31)	松本 玉記 (H15. 4. 1 ~ H16. 3. 31)
	川内 順史 (H16. 4. 1 ~)	
参 事 補	秀島 貞康 (H 9. 4. 1 ~ 調査担当)	
主 任	内田紀代子 (H11. 7. 1 ~ H13. 3. 31)	正法地邦彦 (H15. 7. 1 ~)
事務職員	川瀬 雄一 (H 9. 4. 1 ~ 調査担当)	
調 査 員	古賀 力 (H 9. 4. 1 ~ 調査担当)	橋本 幸男 (H 9. 4. 1 ~ 調査担当)

「風鶴岳支石墓群発掘調査指導委員会設置要綱」に基づき、平成15年度第7次調査時から発掘調査指導委員会を設置した。

指導委員は次のとおりであり、事務局は諫早市教育委員会内に設置した。

会 長	西谷 正 (九州大学名誉教授)
副会長	下川 達彌 (活水大学教授)
委 員	正林 譲 (長崎県考古学会会長)
委 員	甲元 真之 (熊本大学教授)
委 員	橋口 達也 (九州歴史資料館副館長)
参 与	福宜田佳男 (文化庁記念物課)
参 与	宮崎 貴夫 (長崎県学芸文化課副参事)

また委員会開催日は次のとおりである。

第1回会議 平成16年3月5・6日

第2回会議 平成16年8月24・25日

第3回会議 平成16年12月13日

第4回会議 平成18年1月18・19日

第5章 調査の記録

第1節 遺跡の範囲

風觀岳支石墓群は諫早市から大村市にかけての鞍部に広く分布している。

この遺跡は昭和45年に九州横断高速自動車道建設に先立つ大村湾東岸地点埋蔵文化財分布調査が行われ、その時に確認された。

地元では支石墓遺跡という認識ではなく、韓半島と同じ形の墓が存在するという認識がすでになされていいたと聞いています。

今次の調査は諫早市域について実施したのであるが、諫早市下大渡野町と同破籠井町にかけて所在し、大部分は破籠井町に属している。遺跡の中央には旧藩時代の長崎街道が貫通しており、街道の両脇の斜面から山稜部にかけて分布する。

即ち2本の山稜部で囲われた遺跡の面積は諫早市域が約7haほどで、大村市側を含めるとかなりの面積を算出し広大に展開している。

本支石墓群は広域に分布している。このため遺跡を平面的にA～Fの6地点に区分することとした。

各地点の地形的な特徴は次のとおりである。

A地点……風觀岳（別名、日野見岳）の稜線上の西側部分を範囲とする。稜線より北側は急激な傾斜面を見せるのに対し、南側は北側よりもやや緩やかな傾斜面を見せる。傾斜角は23度程を測る。このA地点からF地点にかけては明治期に運動場として利・活用されたため、稜線部分がかなりの程度造成されており、その結果多くの支石墓が消滅したであろうと推察された。事実4次調査で周辺にトレンチを設定して調査したにもかかわらず、支石墓の確認はなされず、土層の堆積も不安定であった。また明治期の銭貨やガラス製品などの遺物が確認されるなど、この間の事情をよく物語っている。

B地点……A地点に接して若干傾斜角を変えるものの、さらに標高を削減しながら風觀岳の鞍部に至る。最低部では、長崎街道が略々東西走している。傾斜角変換付近から最低部ではかつて畠地が展開していたが、現在は植林地として活用されている。

C地点……B地点に接し、南側に標高を削減する部分に位置している。B地点の最低部とで浅い谷地形を形成し、谷頭となっている。中ほどにはアオミゾが付けられており、南方に流下して溜池に繋がり、周囲に狭小な水田が存在していた。昭和50年度の調査では、このC地点で最も多くの支石墓が確認された。

D地点……C地点から標高を削減しきった最高位の稜線付近に位置している。長崎街道を挟んで北側の風觀岳と対をなす位置関係にある。標高は213mを計り、狭小ながらも平坦部をなし、緩やかに東方へ傾斜していく。平坦部には玄武岩の集積部が地表近くに見られるが、露頭は見られない。今次の調査では多くの支石墓を確認した地点であり、また生活関連を思わせる遺構であるピット群や石列を確認した地点もある。また、遺物の出土もこの地点を中心とし

て集中している。

E 地点……B 地点東方に位置し、標高がB 地点よりもやや下がる地点を選定した。B 地点から東南方に延びる等高線はE 地点を通過して北方に回り込み緩やかな稜線をなすが、その手間に当たる部分である。かつて畠地として利・活用されていた部分で、若干の地形の改変が見られる。

F 地点……遺跡最高位の236.23m の三等三角点周辺の地点である。A 地点同様削平がなされたところで、遺構の残存状況は良くなかった。この地点からは丹塗り土器片が確認されており、53号支石墓（S B 2）の存在とあわせて、かつて支石墓が群在したことを髣髴させる。

また支石墓造営のための原材料を切り出したと思われる玄武岩の露頭が隣接し、周辺には3 ~ 4 m ほどの石材が認められる。この地点からは眺望が開け、有明海、大村湾を望むことができる。

第2節 遺跡内における遺物の分布

風鶴岳支石墓群の第1 ~ 8年次の調査では、第21・22表、第23・24表に掲げるとおりの遺物の出土があった。石器では出土点数が1万点を越えており、表層土出土分を除いた包含層出土のもので計数している。全体の87%が剥片や削片で占められている。この石器の数値の偏在性は、本遺跡が単なる支石墓群造営の墓域として機能しただけでなく、生産或いは一定期間の居住を想起させる数値であると理解されるのである。この数値（剥・削片数の全石器数に対する比率）を近傍の遺跡と比較してみると、縄文時代晚期中葉の下峰原遺跡で82%、縄文晚期中葉～後半の下峰原高場遺跡1地点2層で83%、2地点2層で91%であり、また石核（同前）についてみると本遺跡が1.8%であるのに対し、両遺跡では1.5%、0.45%、0.4%と比肩するほどの比率を示している。これは、単なる埋葬域での石器の組成とは考えにくい。

土器については石器と比較して遺物の出土数が少ないと、各地点の遺跡利用の様相を反映させるため表層土出土分を参入して計数している。出土土器全体の93%程はD 地点出土である。調査の重心がD 地点にあったのは確かであるが、各地点の調査面積に基づく土器の出土頻度はD 地点が圧倒的に高く、遺跡の中心がD 地点にあったことを示唆している。このことは埋葬域としてのD 地点の利用頻度が高かったのではなく、埋葬以外の点での利用頻度が高かったことを示しており、各地点における遺物出土の多寡がそのことを物語っている。

さて、これら遺物の包含層は第2層の茶褐色粘質土に包含されるものがほとんどであり、層位に基づく分層的な発掘は不可能であった。

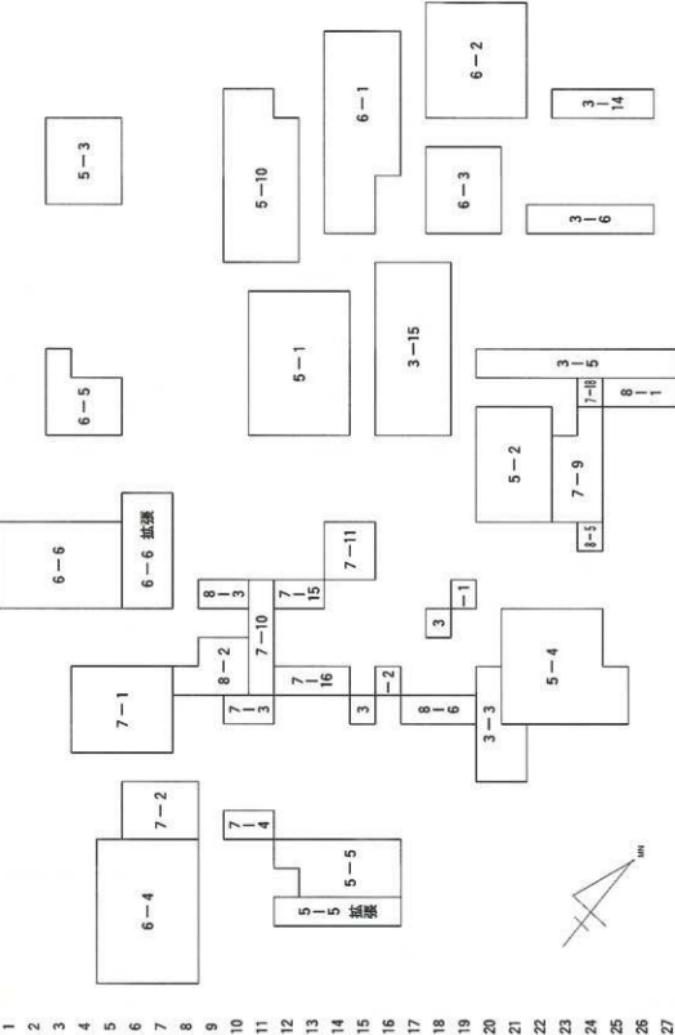
ただ、D 地点の7 ~ 9トレンチから5 ~ 5トレンチ、さらに7 ~ 10トレンチにかけては調査中に「3' 層」と呼称した、基盤層である安山岩火碎泥流の風化土、或いは土壌化した土層が見られ、この層の中には遺物を含んでいる地点も存在した。この層は基盤層の安山岩火碎泥流を素材としていることは、青灰色がかった色調や粒径、粘性などから明らかであり、人為に伴うものでありながらも往時の腐葉土を含んだ層と認めるることはできなかった。このことは、こ

の層が地山から掘り上げられて再度埋土した結果であり、なおかつ短時間のうちに終了した所産であることを想定させた。つまり支石墓造営に際して、周辺の地山の整形や土壤の掘削などの造作の後の、残土の自然堆積状況を示しているのか、あるいは地均しなどの造成を行った結果を示しているのか、のどちらかであろうと推量された。確かに支石墓はこの土層の分布範囲の周辺には確認されるものの、他の場所ではこの層は確認されず、なおかつ支石墓も存在しないという結果と相呼応している。よって、この層の分布する範囲は支石墓が確認される可能性が高く、かつ支石墓造営による土層の搅乱の可能性が高い地点とも考えられるのである。さらにこの層の分布範囲はD地点の平坦部から北斜面部にかけて認められ、支石墓の分布が群としてC地点と繋がることを示している。

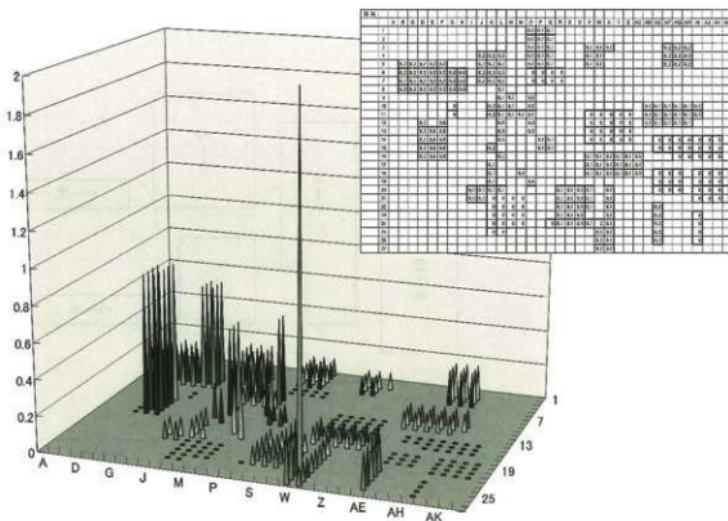
このことを確認しながら遺物の分布傾向をA～F地点で見てみると、3' 層が分布するのはD地点のみであることが知られた。よって各地点とも支石墓の分布は確認されるが、その造営の態様は異なっていることが認められた。

第4図は3-6トレンチの遺物分布図である。長さ10m、幅2mほどのトレンチで、地形の傾斜に沿うように遺物が堆積している。包含層は2層の茶褐色土で石器192点が出土している。削・剥片、使用痕のある剥片の全出土石器に対する割合は87%である。器種は石核4点、搔・削器5点、抉入り石器2点、石錐2点、石鏃8点（2A・E各1点、7B1点、10B1点、14B1点、不明2点）などで構成される。土器は51点を数え、うち1点が丹塗り土器である。刻目突帯文を有する2条甕（41、42、120）、口縁部外側に肥厚部を持つ深鉢（32、33）、外面丹塗りの壺、複線山形文をヘラ描きした壺と思われる資料などがあり、土器は貝殻腹縁による条痕調整を施したものが多く、また刻目突帯文の刻目はユビによる刻目、あるいは棒状工具による刺突・押圧施文例が多い。突帯の貼付位置も口縁下に貼付する例や口唇部に接する例も見受けられる。このトレンチ北側で遺物の平面・垂直分布において集中箇所が見られる。分布範囲は平面で1m内外、垂直で10cm内外である。石器での接合は見られないが、土器の接合では第54図117が遺物2点の接合をみている。第5図は7-18トレンチの遺物分布図である。既掘3-5トレンチとの兼合いから重な設定となったが、5m²という狭小なトレンチから夥しい数の遺物が出土した。石器は1,659点を数え、97%が削・剥片、使用痕のある剥片で占められている。他に石核10点、石鏃15点（2A、4A・B、5B、7B、8B、10A・B）、搔・削器11点が出土した。土器は96点出土し、刻目突帯文の2条甕、屈曲部に刻目を施文しない甕、壺などの器種が見られ、丹塗り土器も8点出土した。突帯文の刻目は棒状の工具で押圧施文するもので占められ、貼付け位置も口唇部に接するものである。土器の接合関係は2点間接合で3例を確認した。また7-18トレンチの北側・下方に設定した8-1トレンチでも石器913点、土器101点（うち丹塗り土器8点）が出土している。削・剥片、使用痕のある剥片が全石器に占める割合は94%と7-18トレンチ同様に高い傾向を示す。土器の接合関係は2点間接合が4例認められる。以上D地点3トレンチの遺物の出土状況を見たが、土器の接合関係や遺物の堆積状況から、いずれも搅乱の度合いの低い同一時期の所産と考えられる。

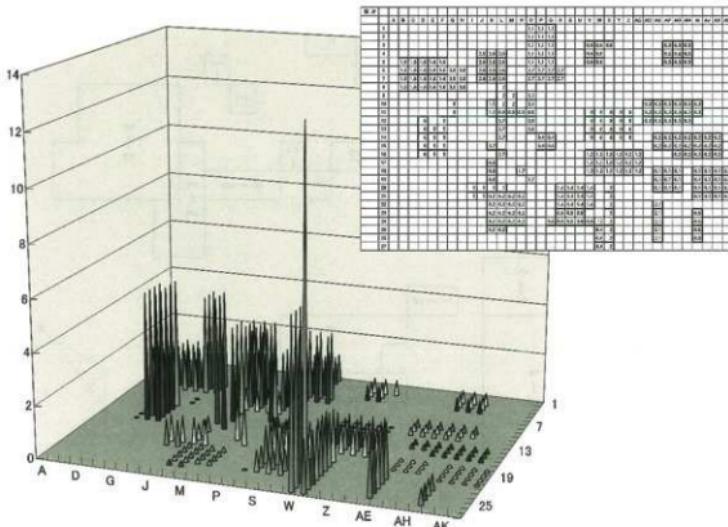
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S U V W X Y Z AC AD AE AF AG AH AI AJ AK AL



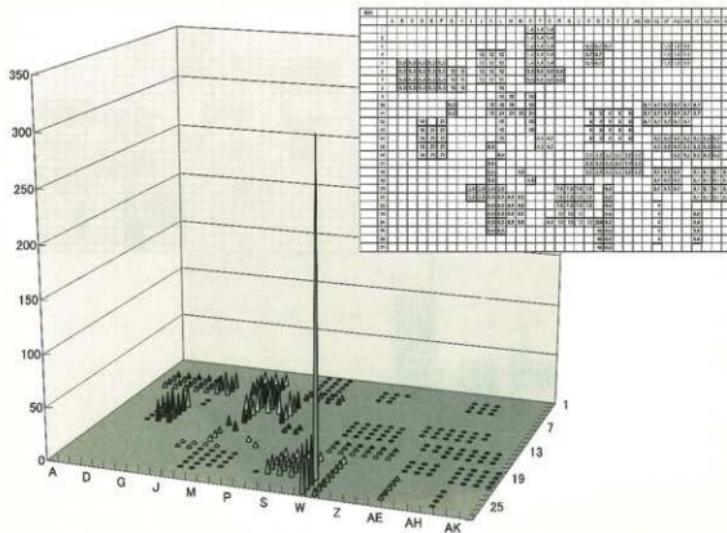
第1表 D地点年次別トレンチ配画概念図



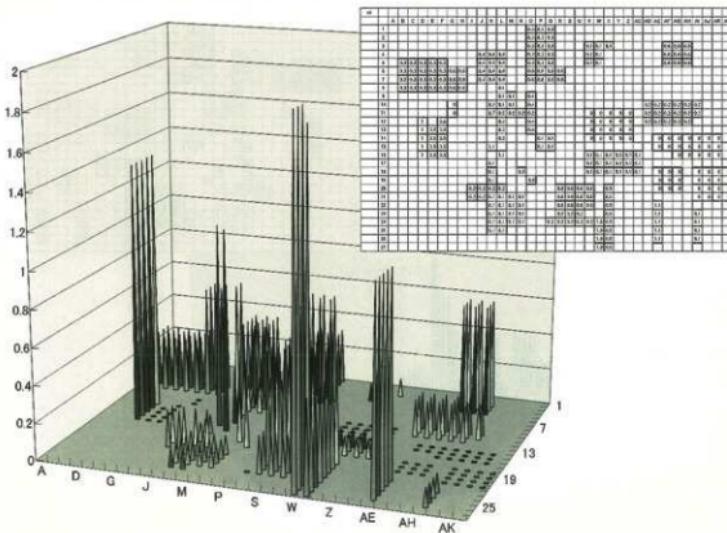
第2表 D地点石核分布概念表・図 (第23・24表のデータをトレンチ面積で除して得た1m単位当たりの出土頻度を基にグラフ化したもの。以下第7表まで同じ。)



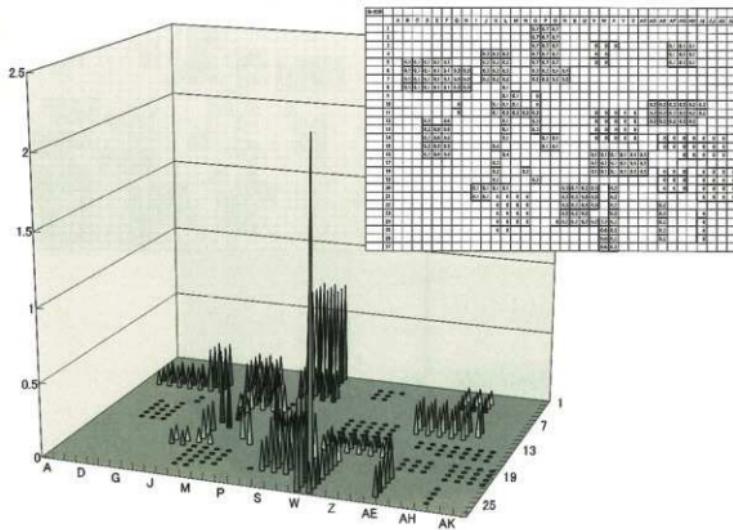
第3表 D地点剥片分布概念表・図



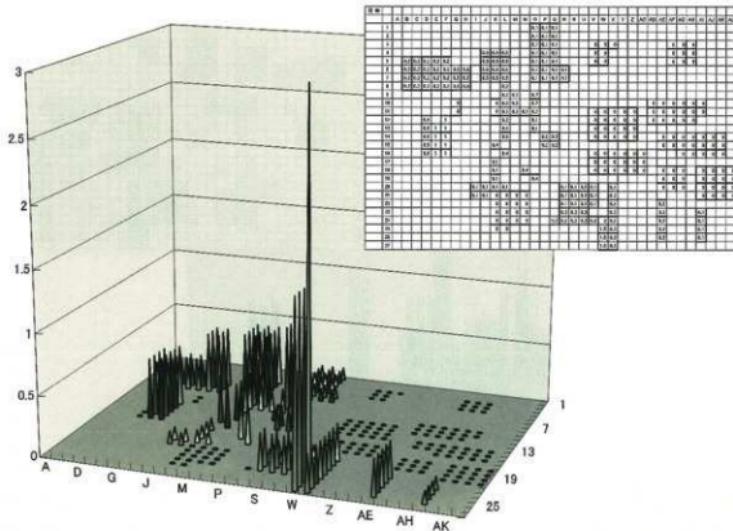
第4表 D地点削片分布概念表・図



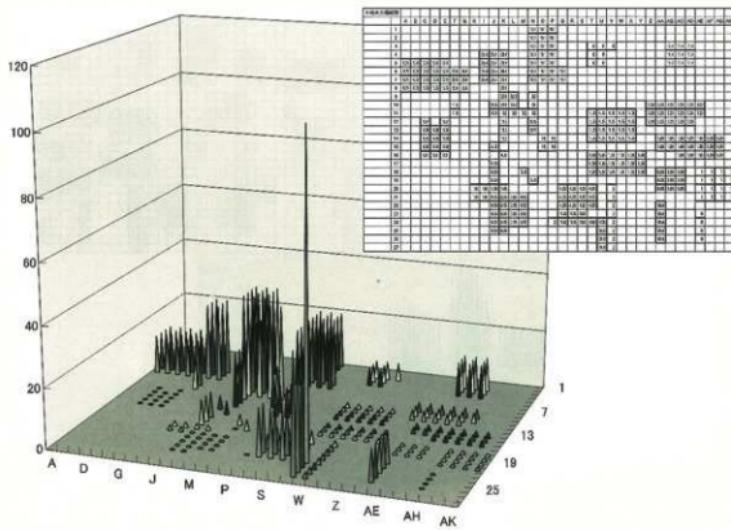
第5表 D地点使用痕のある削片分布概念表・図



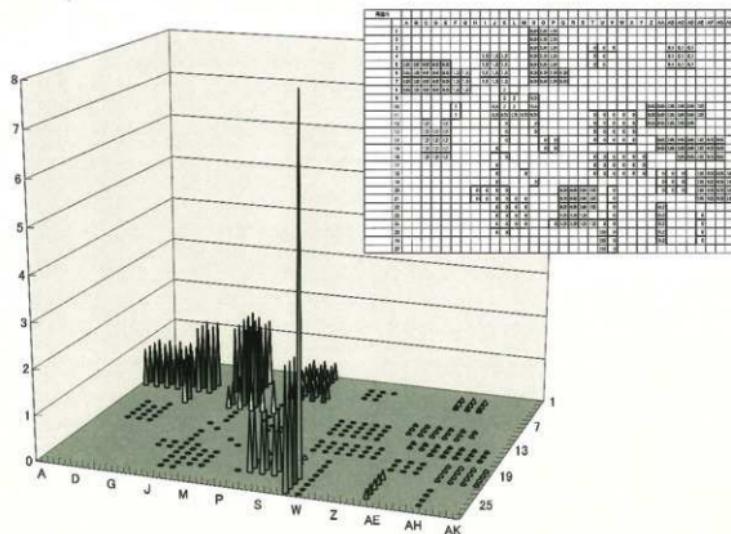
第6表 D地点搔・削器分布概念表・図



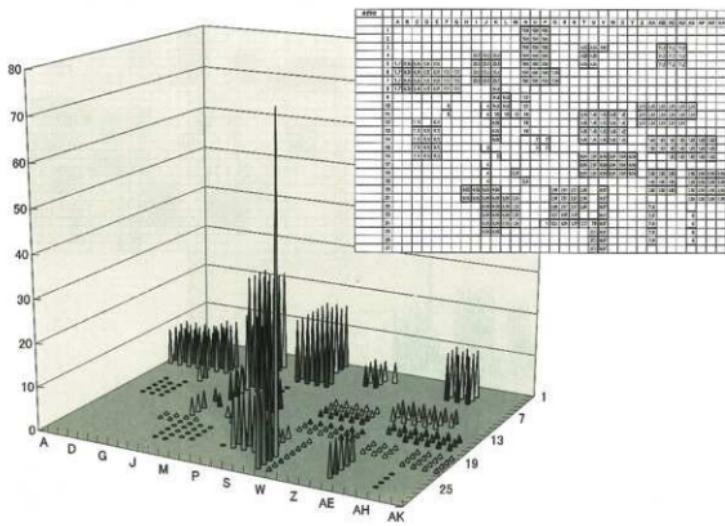
第7表 D地点石器分布概念表・図



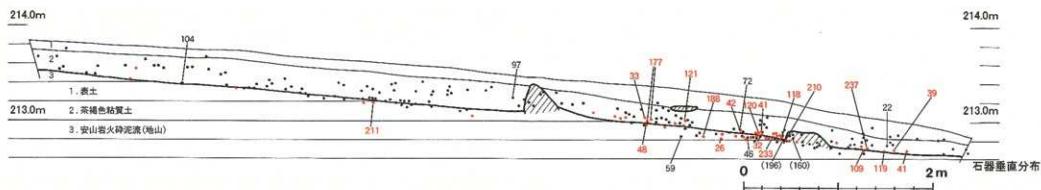
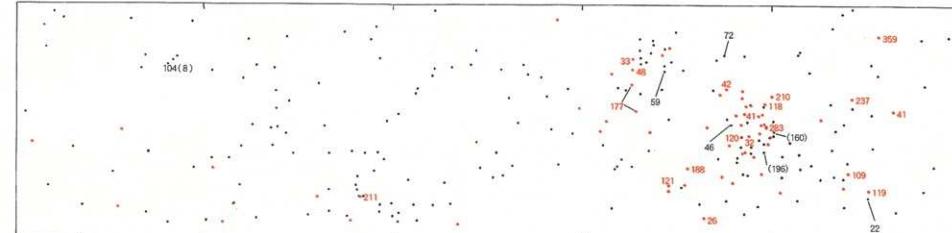
第8表 D地点出土土器分布概念表・図 (第21・22表のデータをトレンチ面積で除して得た1m²単位当たりの出土頻度を基にグラフ化したもの。以下第10表まで同じ。)



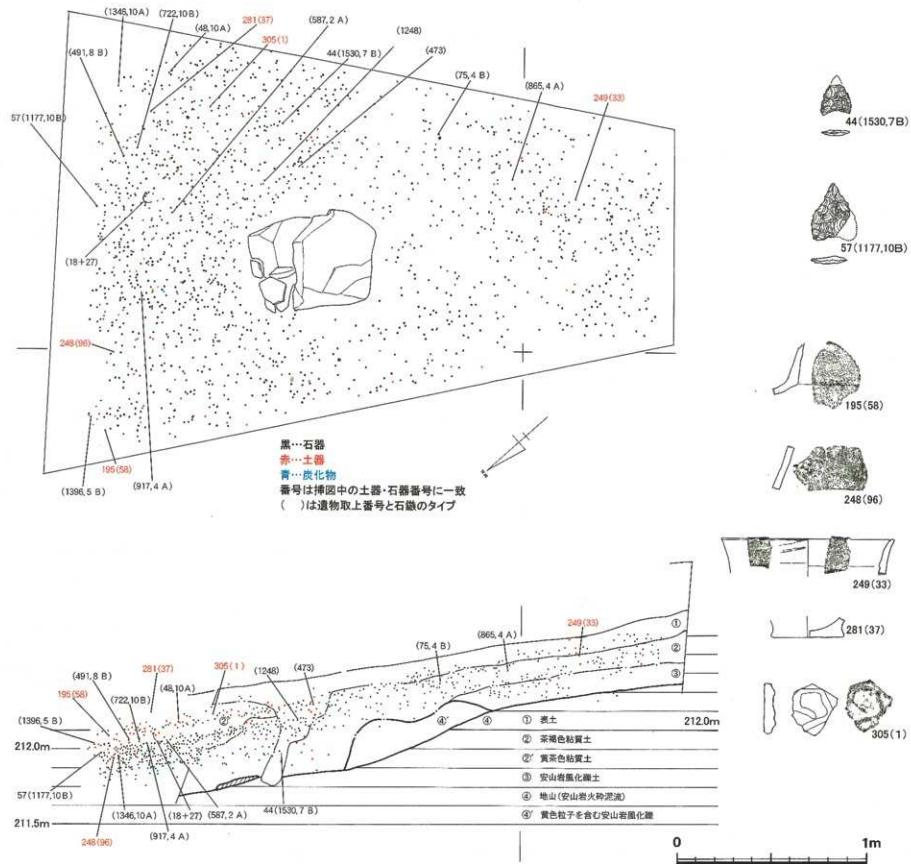
第9表 D地点丹塗り土器分布概念表・図



第10表 D地点角閃石入り土器分布概念表・図



第4図 3-6 トレンチ遺物出土状況図 (S-1/40)



第5図 7-18トレンチ遺物出土状況図 (S-1/20)

第3節 検出された遺構

第1次から第8次調査で確認された遺構は第11表のとおりである。遺構は支石墓33基、石列、ピット群、段差状遺構などを確認した。遺構の説明は調査年次によって調査地点が異なるため地点毎に取り上げることとし、支石墓、石列、ピット群などの順に説明を加えることを先ず記しておく。今次の市の調査分は内部主体が石棺はSAの略記号で、土壙はSBの略記号で整理を行ったが、すでに昭和51年に刊行されている県確認調査の報告書（注1）と整合させるため、第12表のように支石墓番号を統一することとした。県調査支石墓番号はそのまま2桁（支石墓として確定的なもの）、3桁（同不確定なもの）の番号を使用し、今次の市調査分を後続させることとした。よって市調査の第5年次までの概要を記した報告書（注2）の支石墓番号は、第12表のとおり読み替えることとする。

第1項 支石墓及び他の遺構の分布

別図2に支石墓の分布図を掲載した。支石墓は内部主体に

石棺を採用しているもの11基（昭和50年度調査分を含めると23基）、

土壙を採用しているもの23基（前同25基）、

不明0基（前同9基）

の計34基（前同57基）である。

これらは遺跡全域に広範囲に分布し、面積が約7haと広大であるため、昭和50年度の県調査成果をも援用してA～Fの6地点に区分することとした。今次確認の支石墓はB地点を除く全地点で確認された。各地点で確認された支石墓等を列記すると、

A地点……21号～25号支石墓の5基を確認した。

B地点……今回の調査では遺構の確認はなされなかったが、昭和50年度の調査で支石墓が4基確認されている。

C地点……5号、26～29号支石墓の5基を確認。この内5号支石墓はSA10として作図・確認をした。

D地点……30～51号支石墓の22基を確認。この内34号支石墓は県調査107②・市調査SA7として作図・確認をした。この他、石列、ピット群、土師器の土壙等を確認した。

E地点……52号支石墓の1基を確認。

F地点……53号支石墓の1基を確認。この他、玄武岩露頭部の測量・作図を実施。
である。

－1 A地点の支石墓と他の遺構

21号～25号支石墓（SB1、3、8、13、21）の土壙を内部主体とする支石墓5基が確認された。この南斜面には多くの上石様の石材が認められたため、上石を実測して内部主体の確認調査を行ったが、内部主体を認めるものは少なかった。しかし、この地点も支石墓の造営が確

%	種別	下限年 代	上限年 代	考古 学文	測定度	トレンチ	回名	所持する際	備考
1	21号支石墓	上	下	層	2	H10	S.R.1	B	
2	22号支石墓	上	下	層	2	H10	S.R.3	A	
3	23号支石墓	上	下	層	2	H10	S.R.5	A	
4	24号支石墓	上	下	層	2	H12	S.R.6	A	
5	25号支石墓	上	下	層	2	H10	S.R.7	A	
6	26号支石墓	土	土	層	1	H.9	01(A.1)	S.R.2	C
7	27号支石墓	土	土	層	1	H.9	S.H.9	C	
8	28号支石墓	土	土	層	1	H.11	S.A.1	C	
9	29号支石墓	土	土	層	1	H.11	S.A.2	C	
10	30号支石墓	土	土	層	1	H.11	S.A.3	D	
11	31号支石墓	土	土	層	1	H.11	S.A.4	D	
12	32号支石墓	土	土	層	5-8	H11-16	S.A.5	D	
13	33号支石墓	土	土	層	5	H12	S.A.6	D	
14	34号支石墓	土	土	層	5	H12	S.A.7	D	
15	35号支石墓	土	土	層	5	H12	S.A.8	D	
16	36号支石墓	土	土	層	5	H15	S.A.9	D	
17	37号支石墓	土	土	層	7	H15	S.A.11	D	
18	38号支石墓	土	土	層	7	H15	S.B.4	D	
19	39号支石墓	土	土	層	7	H15	S.B.5	D	
20	40号支石墓	土	土	層	7	H15	S.B.6	D	
21	41号支石墓	土	土	層	7	H15	S.B.7	D	
22	42号支石墓	北	土	層	3	H11	S.B.11	D	
23	43号支石墓	土	土	層	8	H16	S.B.14	D	
24	44号支石墓	土	土	層	8	H16	S.B.15	D	
25	45号支石墓	土	土	層	8	H16	S.B.16	D	
26	46号支石墓	土	土	層	8	H16	S.B.17	D	
27	47号支石墓	土	土	層	8	H16	S.B.18	D	
28	48号支石墓	土	土	層	8	H16	S.B.19	D	
29	49号支石墓	土	土	層	8	H16	S.B.20	D	
30	50号支石墓	土	土	層	7	H15	S.B.22	D	
31	51号支石墓	土	土	層	5	H14	S.B.23	D	
32	52号支石墓	土	土	層	5	H14	S.B.24	D	
33	53号支石墓	土	土	層	5	H10	S.B.2	D	
34	54号支石墓	ね	船	1	H.9	S.A.10	D		
35	55号	洞	5	H14	5-5	通標12	D		
36	56号	洞	5	H13	5-9	通標14	D		
37	57号	洞	7	H15	7-9	D			
38	58号	洞	7	H15	7-9	D			
39	59号	洞	5	H13	5-5	D			
40	60号	洞	5	H13	5-10	D			
41	61号	洞	5	H13	5-1	D			
42	62号	洞	6	H14	6-1	D			
43	63号	洞	6	H14	6-2	D			
44	64号	洞	6	H14	6-3	D			
45	65号	洞	6	H14	6-5 新標	D			
46	66号	洞	7	H15	7-15	D			
47	67号	洞	7	H15	7-10	D			
48	68号	洞	8	H16	8-1	D			
49	69号	洞	8	H16	8-2	D			
50	70号	洞	7	H15	7-9	D			
51	71号	洞	7	H15	7-10	D			
番号							大きさ	順序	
52	上石のみ	1	—	—	2	H10	T-2	F.K.2	B
53	上石のみ	3	—	—	—	H10	F.K.16	A	1.05
54	上石のみ	4	—	—	2	H10	F.K.18	A	1.22
55	上石のみ	5	—	—	—	H10	F.K.20	A	1.3
56	上石のみ	6	—	—	—	H10	F.K.21	A	1.4
57	上石のみ	7	—	—	2	H10	F.K.22	A	0.98
58	上石のみ	8	—	—	—	H10	F.K.23	A	1.06
59	上石のみ	9	—	—	2	H10	F.K.24	A	1.12
60	上石のみ	10	—	—	—	H11	No.1(内標)	D	1.1
61	上石のみ	11	—	—	3-3	H11	No.2(内標)	D	0.9
62	上石のみ	12	—	—	—	H11	—	D	1.5
63	上石のみ	13	—	—	3	H11	—	D	1.12
64	上石のみ	14	—	—	3	H11	—	C	0.7
65	上石のみ	15	—	—	3	H11	—	C	2
66	上石のみ	16	—	—	3	H11	—	C	1.2
67	上石のみ	17	—	—	4	H12	—	A	0.95
68	上石のみ	18	—	—	4	H12	—	A	0.74
69	上石のみ	19	—	—	4	H12	—	F	0.75
70	上石のみ	20	—	—	4	H12	—	F	1.3
71	上石のみ	21	—	—	4	H12	—	F	2
72	上石のみ	22	—	—	4	H12	—	F	1.16
73	上石のみ	23	—	—	4	H12	—	A	0.9
74	上石のみ	24	—	—	4	H12	—	A	0.9
75	上石のみ	25	—	—	4	H12	—	A	0.9
76	上石のみ	26	—	—	4	H12	—	A	0.9
77	上石のみ	27	—	—	4	H12	—	F	0.9
78	上石のみ	28	—	—	4	H12	—	F	1.28
79	上石のみ	29	—	—	4	H12	—	F	0.6
80	上石のみ	30	—	—	4	H12	—	F	1.2
81	上石のみ	31	—	—	4	H12	—	F	0.98
82	上石のみ	32	—	—	4	H12	—	F	0.9
83	上石のみ	33	—	—	4	H12	—	F	1.1
84	上石のみ	34	—	—	5	H13	—	F	0.8
85	上石のみ	35	—	—	5	H13	—	F	0.9
86	上石のみ	36	—	—	5	H13	—	F	1.12
87	上石のみ	37	—	—	5	H13	—	F	0.8
88	上石のみ	38	—	—	5	H13	—	F	1.18
89	上石のみ	39	—	—	5	H13	—	F	0.6
90	上石のみ	40	—	—	5	H13	—	F	0.6
91	上石のみ	41	—	—	5	H13	—	F	0.6
92	上石のみ	42	—	—	5	H13	—	F	0.6
93	上石のみ	43	—	—	5	H13	—	F	0.6
94	上石のみ	44	—	—	5	H13	—	F	0.6
95	上石のみ	45	—	—	5	H13	—	F	0.6
96	上石のみ	46	—	—	5	H13	—	F	0.6
97	上石のみ	47	—	—	5	H13	—	F	0.6

第11表 風親岳支石墓群検出遺構一覧表

	新No	地区	石棺	土壤	不明	県調査No	市調査No	市調査No	備考
1	1号支石墓	B	○			1			
2	2号支石墓	B		○		2			
3	3号支石墓	B		○		3			
4	4号支石墓	C	○			4			
5	5号支石墓	C	○			5	S A 10		
6	6号支石墓	C	○			6			
7	7号支石墓	C	○			7			
8	8号支石墓	C		○		8			
9	9号支石墓	C		○		9			
10	10号支石墓	C	○			10			
11	11号支石墓	E		○		11			
12	12号支石墓	E		○		12			
13	13号支石墓	E	○			13			
14	14号支石墓	E	○			14			
15	15号支石墓	E	○			15			
16	16号支石墓	E		○		16			
17	17号支石墓	C	○			17			
18	18号支石墓	C		○		18			
19	19号支石墓	C	○			19			
20	20号支石墓	C	○			20			
21	21号支石墓	A		○			S B 1		
22	22号支石墓	A		○			S B 3		
23	23号支石墓	A		○			S B 8		
24	24号支石墓	A		○			S B 13		
25	25号支石墓	A		○			S B 21		
26	26号支石墓	C		○			S B 7		
27	27号支石墓	C		○			S B 9		
28	28号支石墓	C	○				S A 1		
29	29号支石墓	C	○				S A 2		
30	30号支石墓	D	○				S A 3		
31	31号支石墓	D	○				S A 4		
32	32号支石墓	D	○				S A 5		
33	33号支石墓	D	○				S A 6		
34	34号支石墓	D	○		107②		S A 7		
35	35号支石墓	D	○				S A 8		
36	36号支石墓	D	○				S A 9		
37	37号支石墓	D	○		107①		S A 11		
38	38号支石墓	D		○			S B 4		
39	39号支石墓	D		○			S B 5		
40	40号支石墓	D		○			S B 6		
41	41号支石墓	D		○			S B 10		
42	42号支石墓	D		○			S B 11		
43	43号支石墓	D		○			S B 14		
44	44号支石墓	D		○			S B 15		
45	45号支石墓	D		○			S B 16		
46	46号支石墓	D		○			S B 17		
47	47号支石墓	D		○			S B 18		
48	48号支石墓	D		○			S B 19		
49	49号支石墓	D		○			S B 20		
50	50号支石墓	D		○			S B 22		
51	51号支石墓	D		○			S B 23		
52	52号支石墓	E		○			S B 12		
53	53号支石墓	F		○			S B 2		
54	103号支石墓	B		○	103				
55	106号支石墓	D		○	106				
56	108号支石墓	C	○		108				
57	110号支石墓	E		○	110				

第12表 支石墓統計表

No	種別	凡	共伴遺物				内部主体				上石		構造の状況	支石の数	その他				
			縦内		縦外														
			土葬	台基	その他の	土葬	石室	その他の	形状	長さ	幅	深さ	土軸	奥行き					
1	1号支石墓												1.25	1.25	0.15				
2	2号支石墓												1.6	0.9	0.4				
3	3号支石墓												2.1	1.6	0.3				
4	4号支石墓												2.1	1.6	0.3				
5	5号支石墓	S A 10							半 墓			N80° W				墓 5号			
6	6号支石墓												1.3	1	0.22				
7	7号支石墓												1.9	1.3	0.35				
8	8号支石墓												1.6	1.6	0.2				
9	9号支石墓												2.1	1.7	0.43				
10	10号支石墓												2.9	1.7	0.28				
11	11号支石墓												1.6	1.35	0.5				
12	12号支石墓												1.5	1.4	0.2				
13	13号支石墓												2	1.2	0.2				
14	14号支石墓																		
15	15号支石墓												2	1.55	0.3				
16	16号支石墓												1.1	0.64	0.17	側に上石 ②あり 1.06×0.9×0.2m			
17	17号支石墓												2.0	1.4	0.22				
18	18号支石墓												2.0	1.83	0.59				
19	19号支石墓																		
20	20号支石墓												1.8	1.2	0.3				
21	21号支石墓	S B 1							円 形	0.62	0.6	0.4	N46° W	1.55	1	0.2	3 7 o. 14.52 m ²		
22	22号支石墓	S B 3	C 1	4					椭 圆	0.88	0.55	0.3	N34° W	1.3	1	0.2	風化縫 3 o. 14.52 m ²		
23	23号支石墓	S B 8							不 明				N21° E	1.2	0.9	0.3	風化縫 3		
24	24号支石墓	S B 13							円 形	0.6	0.5	0.1		1.4	1.1	0.2	割り石の集積あり 0.03		
25	25号支石墓	S B 21											0.36	0.4	0.4	N09° W	1.65	1.25	不明
26	26号支石墓	S B 7							椭 圆	0.86	0.7	不 明	N89° E	0.96	0.62	0.1	3 0.12 m ²		
27	27号支石墓	S B 9							長椭圓	0.82	0.53	0.3	E-W	1.56	1	0.17	1層 0.3		
28	28号支石墓	S A 1	U F 1	範例付21									0.83	0.37	0.45	N34° W	1.75	1.05	0.2 3層 3 o. 12.48
29	29号支石墓	S A 2											0.7	0.5		N78° W	1.2	1	0.3 不明 不明
30	30号支石墓	S A 3	2	3									0.58	0.27	0.4	N79° W	1.5	1	0.2 2層 4 o. 063
31	31号支石墓	S A 4	1	3									0.60	0.36	0.32	N87° W	1.1	1	0.2 2層 4 o. 08
32	32号支石墓	S A 5							半 墓				—	1.7	1.05	0.2			
33	33号支石墓	S A 6											0.53	0.3	0.35	N81° E			
34	34号支石墓	S A 7							圓 形	1	0.3	0.6	N77° E	1.86	1.34	0.25	SA16の上石にもたせた石材が本支石墓の上石。		
35	35号支石墓	S A 8	1	1									0.83	0.33	0.45	N83° W	1.25	0.9	0.35 3層 4 o. 12.3
36	36号支石墓	S A 9											—						
37	37号支石墓	S A 11							半 墓				—				墓10号 (SA7の上石の下に存在する支石墓)		
38	38号支石墓	S B 4	3	14					略方形	0.6	0.5	0.15	N41° E	0.6	0.6	0.15	右側		
39	39号支石墓	S B 5							椭 圆	0.78	0.2	0.1	N43° E						
40	40号支石墓	S B 6	2						円 形	0.6	0.6	0.2					近くに上石		
41	41号支石墓	S B 10							方 形	0.65	0.55	0.3	N23° E	1.25	0.9	0.2			
42	42号支石墓	S B 11							椭円?				—	1	0.8	0.2			
43	43号支石墓	S B 14	C 2	11					橢円形	0.57	0.59	0.2	N71° W	0.85	0.67	0.2 風化縫	4 1-4トレンチでSB4・15の上石が隣接。		
44	44号支石墓	S B 15	右端1, 13						楕円形	0.91	0.26	0.27	N39° W	0.75	0.7	0.12	4 9-5トレンチでSB4・14の上石が隣接。		
45	45号支石墓	S B 16	右端2, C 2						半 墓				—	1.17	0.95	0.23 風化縫	5-6トレンチ内、SA 5の上に隣接。		
46	46号支石墓	S B 17							半 墓				—						
47	47号支石墓	S B 18							半 墓				—	0.92	0.62	0.2			
48	48号支石墓	S B 19							半 墓				—	0.55	0.44	不 明			
49	49号支石墓	S B 20	12	32	調査物20				半 墓	0.74	0.43	0.14	N42° E	1.05	0.85	不 明	上五段成石や土塗の脊齊より支石墓と確認。		
50	50号支石墓	S B 22											N89° W	1.25	0.7	0.1			
51	51号支石墓	S B 23	1	3									0.35	0.3	0.2	N48° W			2
52	52号支石墓	S B 12							円 形				N11° E	1.97	1.03	0.35			
53	53号支石墓	S B 2							椭円内	1.12	0.45	0.22	N50° E	1.25	0.96	0.25 風化縫			
54	54号支石墓																		
55	55号支石墓																		
56	56号支石墓																		
57	57号支石墓												1.86	1.03	0.35				

第13表 支石墓属性一覧表

認されるため、上石が移動させられたものと想定される。

－1）21号支石墓（S B 1）（第6図、図版1）

風観岳稜線部から南斜面に移る標高231m付近で確認した。

【上 石】 長軸1.55m、短軸1m、厚さ20cmを測る玄武岩板状石を被覆している。形状は長椭円形を呈す。上石の短軸方はほぼ水平位を保つものの、長軸方は西に若干傾いている。

【内部主体】 土壌を採用している。北西方に設定したサブトレンチにより一部掘りすぎているが、検出面で長さ80+cm、幅65+cm、床面で長さ62cm、幅60cm、深さ40cmを測る。形状は略円形を呈している。床面はほぼ平坦である。実測主軸はN46° Wである。

【蓋 石】 確認できなかった。本來存在せず、木蓋であった可能性が高い。

【支 石】 上石近くに3個確認されるが、地山に本来含まれる石であり積極的に支石とは見なしがたい。

【覆 土】 地山に含まれる風化礫混じりの黄褐色粘質土で、再度埋め戻されたものである。

【出土遺物】 土壌内覆土を飾にかけて精査したが、遺物の確認はなされなかった。

－2）22号支石墓（S B 3）（第7図、図版2）

21号支石墓から南へ27m、比高-3m強の斜面中ほどの標高227m付近に存在する。

【上 石】 長軸1.3m、短軸1m、厚さ20cmの玄武岩板状石を使用している。形状は方形に近い。南方にわずかに傾斜しているが、斜面の傾斜角とは違い水平位に近く、北東方にずれているが旧状を保っているようだ。

【内部主体】 土壌を採用している。形状は円形に近く、床面付近で75×55cm、上面で97×88cm、深さ30cm程である。床面は若干くぼむもののほぼ平坦である。床面への造作はなんら認めない。土壌上面には拳大から小児人頭の大安山岩風化礫や小塊石が、上石の範囲内に認められた。土壌主軸はN54° Wである。

【蓋 石】 確認できなかった。

【支 石】 支石は3個確認した。ともに土壌端より内側に入る。

【覆 土】 安山岩風化礫を含む明褐色粘質土で、土壌を掘り上げた後埋め戻している。

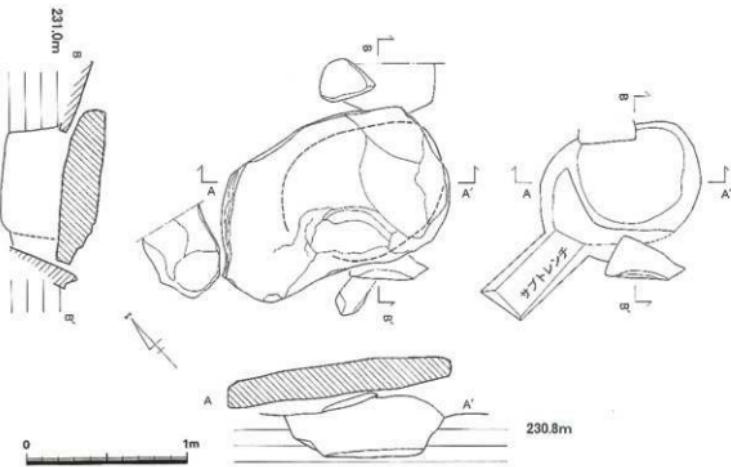
【出土遺物】 土壌内から微細な黒曜石削片が1点出土した。

－3）23号支石墓（S B 8）（第8図、図版3）

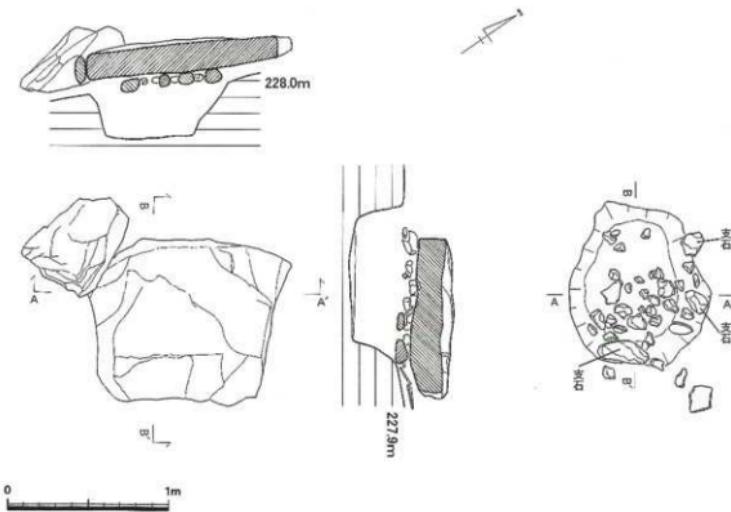
22号支石墓から西へ16m、比高-3.5mの南斜面標高224m強の位置に存在する。

【上 石】 長さ1.2m、幅90cm、厚さ30cm弱を測る。形状は略方形を呈す。主体部との位置関係からすると、南西方にずれており、また南方に若干傾いている。

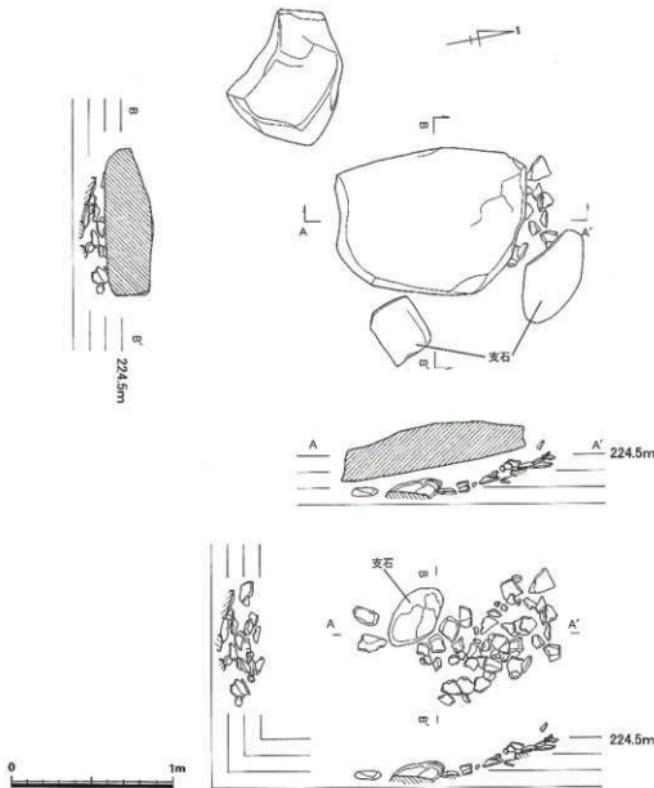
【内部主体】 22号支石墓と同じく土壌を採用していると思われるが、下位は調査を実施していない。上面には玄武岩小板石を上石の範囲内に被覆している。実測主軸はN21° Eである。



第6図 21号支石墓（SB 1）実測図（S-1/30）



第7図 22号支石墓（SB 3）実測図（S-1/30）



第8図 23号支石墓 (SB 8) 実測図 (S-1/30)

[蓋 石] 存在せず。

[支 石] 上石の東側の塊石と、上石直下の計3個が支石と思われる。

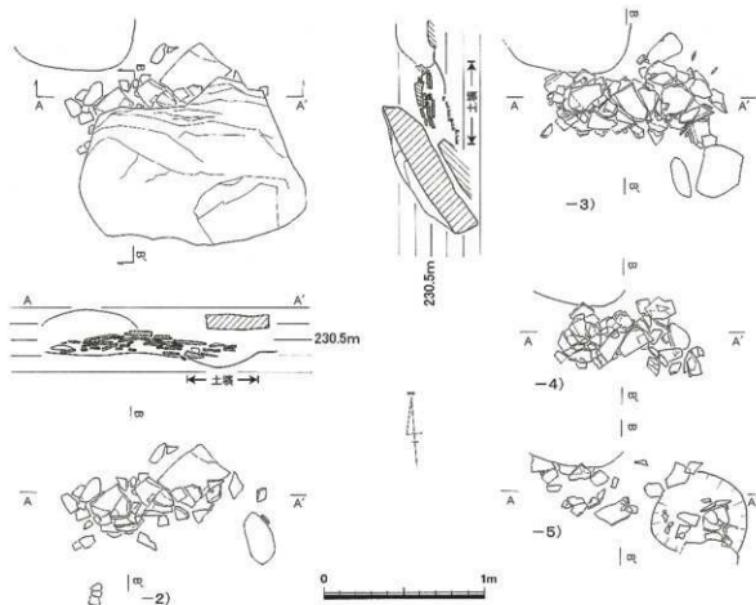
[覆 土] 調査していない。

[出土遺物] 遺物の確認はなされなかった。

- 4) 24号支石墓 (SB 13) (第9図、図版4)

21号支石墓から北西に35m、標高230mに位置している。

[上 石] 長軸1.4m、短軸1.1m強、厚さ20cmの玄武岩板状石を使っている。形状は略長方形で、厚さも一定している。上石長軸は等高線と並行するように据えられているが、南方へ大きくずれて落ち込んでいる。



第9図 24号支石墓 (SB13) 実測図 (S-1/30)

[内部主体] 上石東端部に約半分裂かる状態の浅い半円状の土壙を確認した。法量は60cm×50cmほどで断面は船底状を呈している。土壙南には地山からの石が追り出して、支石を兼ねるような様相を見せており、レベル的に整合しない。土壙北側には玄武岩の小板石を3～4段（-2～5）、長さ1.1m、幅40cm、厚さ20cm程に重ね積みしている。この積石はほぼ土壙を覆うように被覆されており、一部は土壙内に落ち込んでいる。この石積みが南側等にも存在したと仮定すると、上石の転落の原因となったのは抜き石等が想定される。

[蓋 石] 存在せず。

[支 石] 不明である。

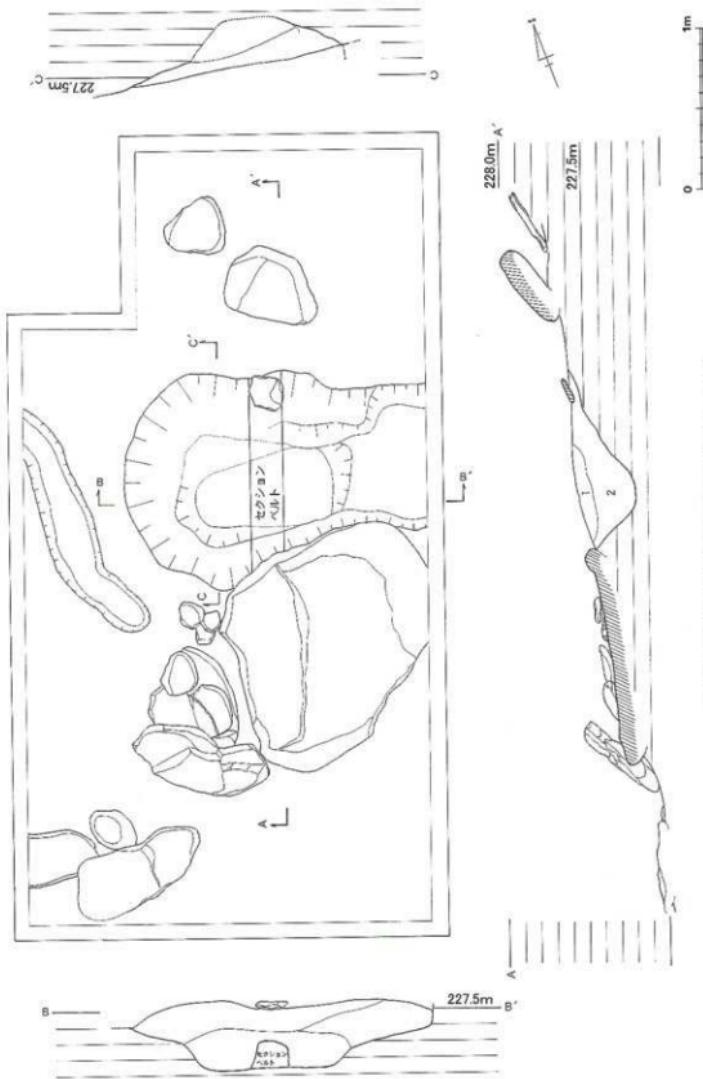
[出土遺物] 遺物の確認はなされなかった。

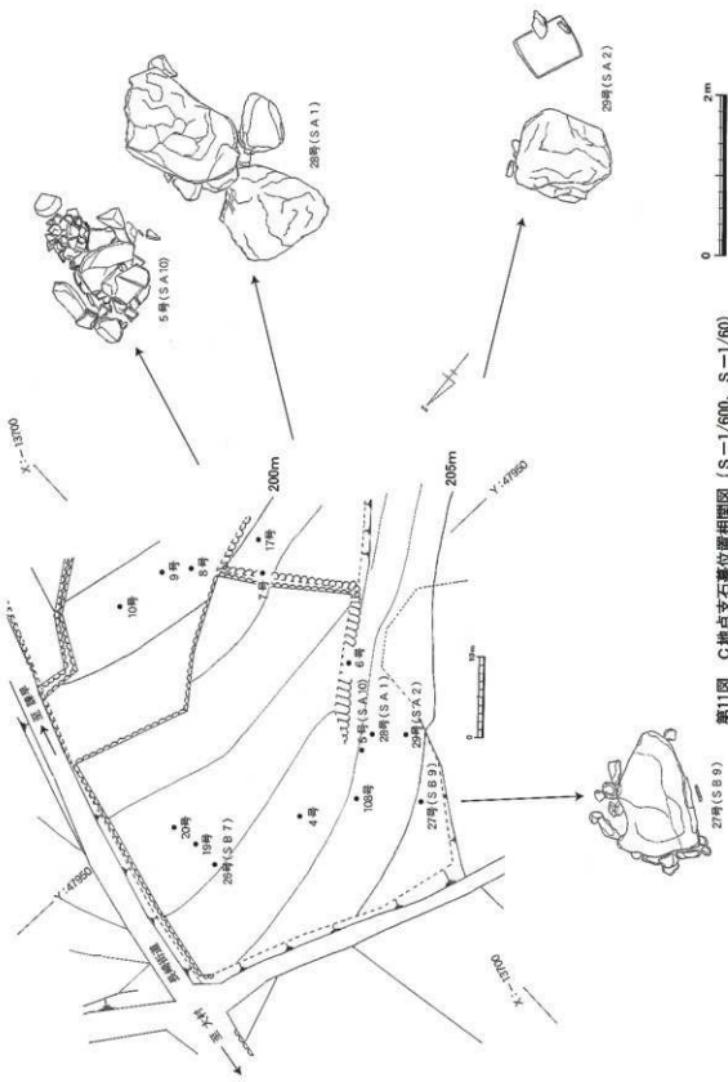
- 5) 25号支石墓 (SB21) (第10図、図版5)

F K-34として設定したトレンチで、南斜面のほぼ中ほどで確認した。標高は226m前後を測り、22号支石墓の西6mに位置している。

[上 石] トレンチ南端に接するように長さ1.65m、幅1.25mの略円形の板状石がある。上面は平坦で、底面の形状は湾曲するようで、反転させられている。この反転した上石を復元すると土壙上に被り、上石として機能したものであることが理解される。

第10図 25号支石墓 (S-B21) 実測図 (S-1/30)





第11図 C地点支柱位置相関図 (S-1/600、S-1/60)

【内部主体】 上石北側の土壙で、形状は長梢円形を呈し、断面は逆梯形状をなす。法量は長軸1.9m+、短軸1.3m強で、深さ40cm強を測る。掘り方は2段になり、床面は86×40cm強の長梢円形を呈している。床面はほぼ平坦である。この土壙は2段掘り様となっているが、上石除去後周縁が崩壊して肩部が消滅した結果、2段掘り様となったものであろうと想定される。土壙主軸はN69°Wで、等高線に平行している。

【蓋 石】 存在していない。上石西側に板石が6～7枚重ねられているが、これは上石下面が剥離した石材であり、蓋石の可能性は低いものである。

【覆 土】 土層は2層に別れる。1層は黒色土層で、後世の流れ込み土である。2層は茶～黄色粘質土で地山の土の再埋土である。

【出土遺物】 土壙の覆土1層上位から滑石製臼玉、炭化物、焼土片、黒曜石削片、土器片などを検出した。滑石製臼玉の検出からすると、古墳時代に上石を外すなどの搅乱がなされたものと想定される。

第2項 B地点の支石墓と他の造構

植林中及び畑にトレンチを設定して調査を行った。昭和50年度の県調査では4基の支石墓が確認されていたが、今次の調査では支石墓や造構の確認はなされなかった。

第3項 C地点の支石墓と他の造構

26～29号支石墓、5号支石墓の5基の支石墓を確認・追認した。

－1）5号支石墓（SA10）（第12図、図版8・9）

28号支石墓の北側に隣接し、主軸方も同一方である。昭和50年の県調査でNo5とされた支石墓である。

【上 石】 昭和50年次には既に存在していなかった。

【内部主体】 箱式石棺を採用していると見られる。蓋石までの実測で終了した。石棺の主軸は判然としないが、実測主軸はN80°Wを測る。

【蓋 石】 玄武岩小板石で被覆する。被覆した範囲は長軸1.52m、短軸1.3mほどであり、被覆の状況から下位にもう一層の蓋石があるものと想定され、最低2層の蓋石で閉塞している。

【支 石】 確認されなかった。

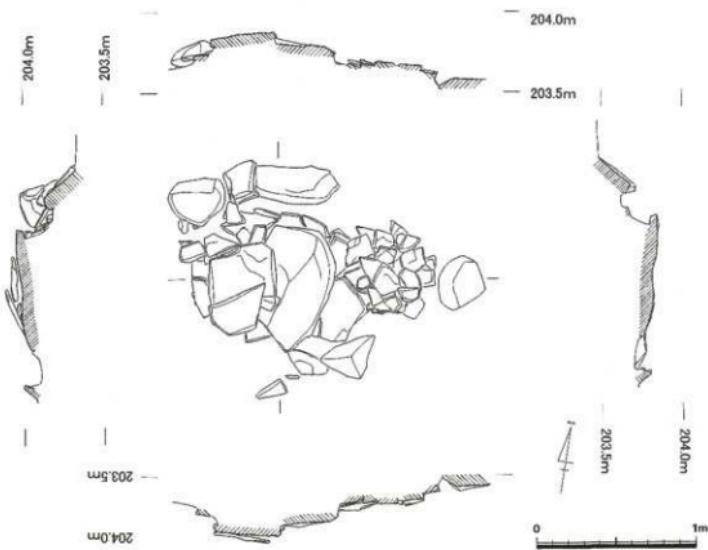
【掘り方】 確認していない。

【覆 土】 確認していない。

【出土遺物】 確認していない。

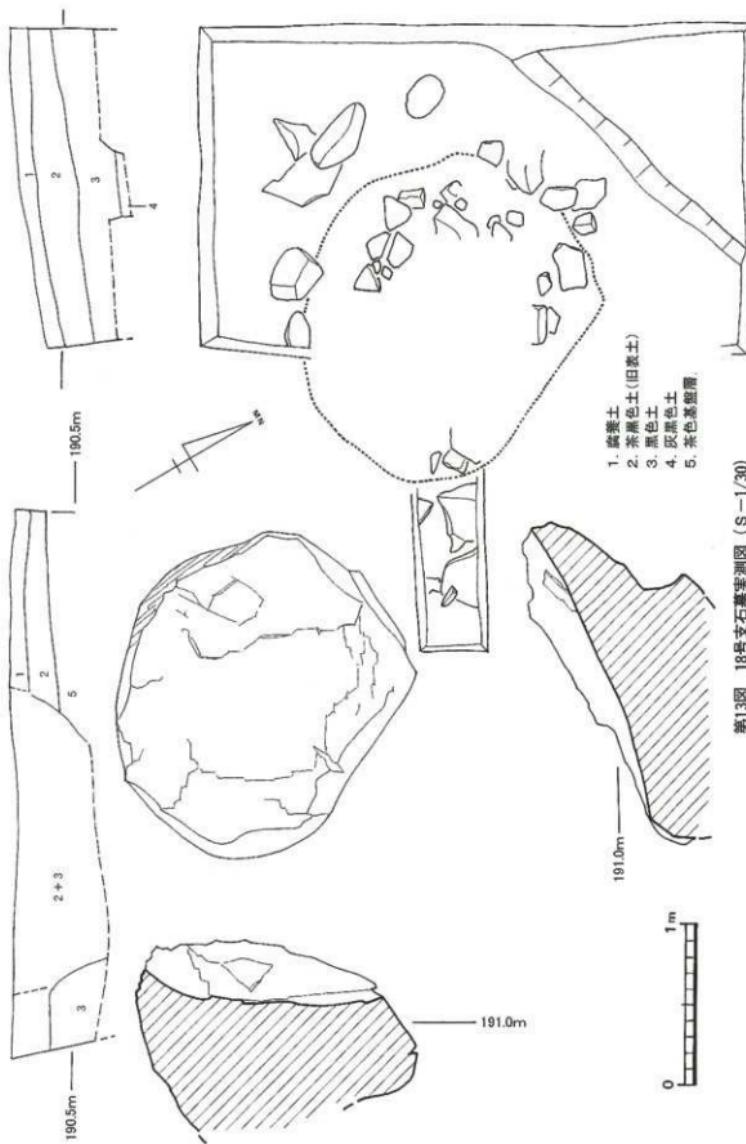
－2）18号支石墓（第13図、図版51）

C地点の谷部分に位置する。この地点ではもっとも標高が低位にあり標高191m前後を測る。

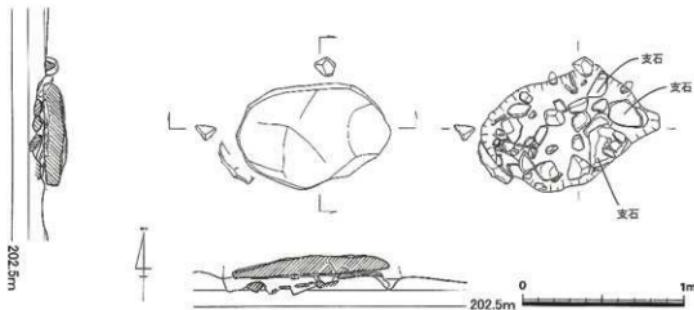


第12図 5号支石墓（S A10）実測図（S-1/30）

また遺跡の東の限界を示唆するものとして県調査以来の周辺調査を行った。昭和50年度の県調査では、この支石墓周辺に複数の支石墓の存在を想定していた。今次の調査で、この上石様塊石は径2mほどの玄武岩で厚さが1m弱ほどを測り、周辺に支石墓が存在しないことが判明した。上面は傾斜があるが、全体的に蹲状をなしている。上石様塊石は不安定な状況で存在しており、そのため石材の根の部分までは精査していない。この石材の下部は黒色土が存在し、同層中に安山岩の小塊石が存在している。土層の観察では3層の黒色土下に灰黒色土があり、その下位に地山層である茶色の火碎泥流が存在している。この上石様塊石が玄武岩であり地山層の安山岩火碎泥流層中には包含されないことや、塊石が黒色土に乗っていることから他所から切り出して配石したものであることを示している。かつては複数の支石墓の存在を想定したが、現地調査で他の支石墓の存在する可能性が低いことや、立地地点が谷奥部で狭隘部に位置していること、かつ本支石墓が果たして内部主体を有するかどうか疑問の点も存在するため、この支石墓・塊石は単体で存在するものと想定される。さらに、この支石墓・塊石の下方100mほどに溜池が存在している。元来湧水地点があったもので、それをを利用して貯水したものである。また周囲には古く水田があったような地形を示しており、土地利用の点からかつて水田が存在したであろう蓋然性は極めて高い。このような地点に隣接して立地することから、この支石墓・塊石の機能は支石墓域の標識的機能を帯びているものと想定されるのである。



第13图 18号支石墓实测图 (S-1/30)



第14図 26号支石墓（SB 7）実測図（S-1/30）

— 3) 26号支石墓（SB 7）(第14図、図版6)

等高線に直行するトレンチで確認した。確認面は地山の火碎泥流面であり、上位の土層は流失している。

[上 石] 長軸96cm、短軸62cm、厚さ10cm強の扁平な橢円形の安山岩を使用しており、水平位に据えている。

[内部主体] 土壌を採用している。法量は95cm×70cmほどで、深さは不明である。土壌上面には上石の範囲内に安山岩の小塊石が分布している。土壌主軸はN89° Eを測る。

[蓋 石] 存在しなかった。本来は木蓋であった可能性がある。

[支 石] 支石と思われる塊石を3個土壌内で確認した。

[覆 土] 上面のみを精査し、出土炭化物を放射性炭素年代測定試料とした(第6章第2節参照)。

[出土遺物] 確認していない。

— 4) 27号支石墓（SB 9）(第15図、図版7・8)

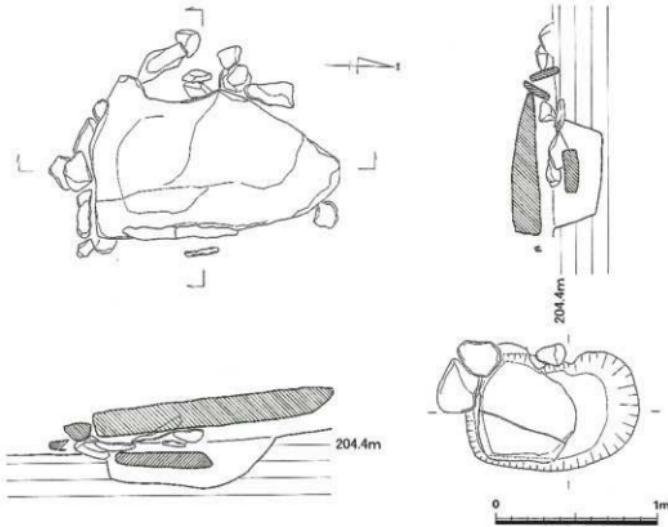
29号支石墓の西側14mの位置で確認された。

[上 石] 長軸1.56m、短軸1m、厚さ17cmを測る玄武岩の長三角形状の板状石を採用している。上石は内部主体の土壌の上に位置し、後世の搅乱等の影響は受けていない。

[内部主体] 土壌を採用している。法量は上面で117×70cm、床面で82×53cm、深さ30cm弱を測る。形状は橢円形で、床面は平坦面をなす。土壌掘り方は北側小口部が緩やかに外傾するのに対し、他の壁は垂直に近く掘り込まれている。土壌主軸は略々東西をとる。

[蓋 石] 土壌内には床面から10cmほど浮いた状態で60×60cm、厚さ10cmほどの円形扁平石が確認された。

[支 石] 小塊石を土壌上面周縁の南側から中ほどにかけて10個前後据えて支石様としているが、北～東側に認められることから支石の機能を兼ねているものと想定される。



第15図 27号支石墓（SB9）実測図（S-1/30）

【覆土】 黄褐色粘質土で、地山の安山岩火碎流堆積物の再埋土である。これは土壤掘削の後、掘り上げた土を土壤内に再度埋土したものである。

【出土遺物】 遺物の確認はなされなかった。

—5) 28号支石墓（SA1）（第16図、図版8～10、54）

長崎街道南側の標高204m付近で確認された。遺跡のほぼ中央部にあたり、浅い谷地形を示し始める地域に当たっている。

【上石】 長軸1.75m、短軸1.05m、厚さ0.2mの玄武岩板状石を上石として使用する。上石は露頭から剥離されたものを移動して持ち込んでおり、ほぼ同じ厚さを示している。上石は標高の低いほうに若干ずれているが、下部構造である石棺の傾きと同じであり、横方向にずれたもののはば原位置に近い状態を保っている。この上石のすぐ西側に長軸1.3m、短軸1.15m、厚さ15cm程の上石様の板状石が、2層目の蓋石の下で、かつ1層目の蓋石に接するような状態で確認されている。この上石様板状石の下部をボーリングした結果、石棺様の下部構造は確認されず、また掘り下げると28号支石墓を崩壊させる可能性があった関係から深掘を行わず、現状で保存した。この石材は5号支石墓用の上石としては小振りであるため、別の支石墓の上石として搬入したものか、あるいは28号支石墓用の上石として準備したものか、規模的な観点から使用しなかったかのどちらかであろう。このような事例は、30号支石墓の近くでも、二段に重なった上石様の円形板状石が確認されている。